
SCGの魔眼使い

西城優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SCGの魔眼使い

【Nコード】

N2824V

【作者名】

西城優

【あらすじ】

SCG（能力者統括団体）に所属された少年、高天原鏡矢。強者の集うSCGでも注目されている新人の彼はとある特殊な力を内に秘めていた。主人公最強物です。

ブローグ

一面真っ白な壁に覆われた廊下を歩き、一人の少年はとある部屋を目指していた。

服は廊下の色とは相反する黒。髪も瞳の色も黒と、まるでカラスのような風貌をした少年だ。

周りに人の姿はなく、彼が廊下を歩く足音だけが辺りに響く。

「休日に来て呼び出されるとは思ってもみなかつたな」

「そうですね。おそらくは急な任務ではないかと」

周囲に彼以外人の姿はない。しかし、彼の言葉に返答する女性の声が聞こえた。

その声は彼が肩につけている携帯端末から聞こえてくる。彼が身につけているそれはインテリジェント・デバイスと呼ばれている物で、人工知能を有する携帯端末の事を意味する。

「やっぱりそうだな。はあ、休日ぐらいゆつくりさせてもらいたい」

「仕方が無いですよご主人様。あなた様はSCG期待の新人なのですから」

SCGというのはスキル スキル コントロール コントロール グループ グループ、通称能力者統括組織の事だ。人間が時折発現させる能力、その暴走を防いだり、能力者の保護を主な活動にしている団体である。

「セーラ。それは流石に言い過ぎだ。SCGの奴らは新人の俺なんかに期待なんて寄せちゃいないさ」

セーラと呼ばれたインテリジェント・デバイスは否定の声を上げる。

「いいえ。幹部の方々はあなたの仕事ぶりを驚いていました。SCGに所属する強力な能力者達もあなた様へ興味を示しています。もしかしたら、近々模擬戦を挑まれるかもしれません」

「……それこそ勘弁してほしいなあ」

溜息をついてからしばらく進むと、一人と一機はとある部屋の前に到着する。

『準司令室』と書かれたプレートが自動ドアの隣に掛けられている。少年は黒服のポケットからカードキーを取り出し、カードスキャナーにカードを通した。

カードスキャナーの小さな画面に『OK』という表示が現れ、自動ドアが横にスライドされる。

中へと入り歩みを進めると、そこには広い部屋があった。

あるものは事務に使う机と四人掛けのソファが二つ。その間に長いテーブルが一つ。床には茶色い絨毯が引かれている。窓は前面ガラス張りで、外の景色を一望出来る贅沢な作りになっていた。

「休日呼び出して悪かったですね」

その窓の傍に立ち、外の景色を眺めていた人物が振り向く。

ほっそりとした体格に黒縁の眼鏡。銀色の長髪は後ろで束ねられていて、穏やかそうな表情によく合っていた。

「全くですよ。せめて仕事は平日に入れてもらえませんか？ 来栖さん」

少年に遠慮なく文句を言われ、来栖修二郎は苦笑する。

「すみません。なにせ総司令官の指示でして。新人、たかまがはらきょうや高天原鏡矢にレベルAの能力者を確保させよ、と」

「……レベルAって、新人の俺にですか？」

能力者にはレベルが存在し、上から順にA〜Eとランク付けされている。ランクAの能力者は、SCGに所属する有能な能力者が出勤させられるレベルだ。

「ええ、仕事が終わりに次第家に帰宅してもいいようです。拒否権はありませんのであしからず」

鏡矢の元に近づいて、来栖は手に持っているUSBメモリを鏡矢のインテリジェント・デバイスに差し込む。数秒後にはメモリを抜いた。

「ターゲットの能力者の情報、そして現在地。もろもろのデータを転送しておきました。気をつけて行ってきてください」
「……………」

あまりにも無理やりで、準司令官の前で鏡矢は深く溜息をついた。

任務

「急な任務という事には驚かなかったが、まさかその任務がレベルAの確保だなんて考えてもみなかったな」

SCGの拠点を後にして、鏡矢は背の高い建物の並ぶ街の中を歩いていた。

空はどんより曇り空で、今の鏡矢の心をそのまま空に映し出したかのようなだ。

「そうですね。ご主人様は確かにすごいですが、二回目の任務でレベルAの能力者を担当させられるとは私も思いませんでした。同期の能力者達は、きっとご主人様に嫉妬なされているでしょうね」

セーラはインテリジェント・デバイスの画面を点滅させながら鏡矢が発した言葉に対応する。

交差点に差し掛かり、信号が変わるのを待つ。

「俺からすれば、むしろレベルEとかDの能力者の担当で済んでいる周りの奴らの方が羨ましいよ。休日に呼び出されたりもしないしさ」

「そう言うっては同期の方々に失礼です。こうして実力を認めてもらえるのは喜ばしい事ではないですか。昔に比べれば、今の状況は恵まれていると思いますよ？」

「……まあ、昔に比べればな」

思い出したくもない過去の出来事を思い出しそうになり、鏡矢は頭を振って思考を払った。

周りにいる人々は、そんな鏡矢の様子を訝しんだりしない。他人に興味がないと言わんばかりに携帯に目を落したり、友人と楽しみに会話をしている。

ゆえに一人で話しているように見える鏡矢が注目を浴びたりするような事もなかった。

「それより、レベルAの能力者の詳細説明を頼めるか？」

「分かりました」

数秒の沈黙をはさみ、セーラが先ほど受け取った情報の説明を始める。

「能力者の名前は神崎綾^{かんざきあや}。能力が発動したのは二ヶ月前で、それからは能力者専門学校に転校。しばらくは大人しく生活していたようですが、能力が完全覚醒へと至ってレベルAに。

学校の寮にも帰らなくなり、街の中を徘徊しているようです。保有する能力は軌道迷走^{ルートバグ}という、物の攻撃の軌道をずらす能力だそうです」

「随分と厄介な能力だな……」

人が発言する能力は様々に存在する。

例を挙げるなら攻撃的な能力。炎を顕現させたり、吹いている風を収束して放つたり、拳を鋼鉄化させ、コンクリートを砕いたり、攻撃能力だけでもバリエーションに富んでいる。

神原綾という人物が有している能力は、数ある能力の中でも上位に部類できるものだろう。

能力情報が正しいのなら、使い方によって交通事故を引き起こしたり、場合によってはもっと大きな事故を起こす事だって可能なのだから。

「神崎がいる場所はおおよそ検討がついてるのか？」

「はい、日時や目撃情報を照らし合わせた結果、瓦河に滞在している可能性が高いです」

「電車を乗りついで二つ、か。逃走してからの数日間、交通機関を使わずに徒歩で移動してたつて所か」

「そのようですね。能力を使った形跡はなさそうです。完全覚醒によつて精神状態が不安定なのかもしれません」

「戦う際は注意を払わないとな。もっとも、レベルAという時点で気を抜けるわけがないんだけど」

信号が変わり、人の波が反対側の歩道へ進まんと動き始める。

その中を、鏡矢は流れに逆らわず移動する。傍から見れば誰も、彼が異能の力を身に宿しているとは思わない。

「さつさと終わらせて布団にでも潜ろう」

「ご主人様。休日だからといってだらけて過ごしてはいけませんよ」

窘められて、ご主人と呼ばれる少年は苦笑を浮かべる。

瓦河を目指して、二人人で一組の彼らは駅へと足を踏み入れた。

切符売り場には立ち寄らず、鏡矢は懷からカードのような物を取り出す。

SCGで支給される交通機関無料パスだ。遠方へ移動して任務を行う事もあるため、SCGに所属すると同時に支給される。

交通機関パスを改札口にかざし、鏡矢は駅の奥へと進んでいった。

能力者

駅の中は広く、様々な路線で入り乱れている。普段から駅を使っていなければ迷ってしまいそうな程である。

しかし、鏡矢は迷うことなく目的の路線のホームへと向かう。インテリジェント・デバイスであるセーラが道案内を行ってくれるので、駅の中を迷わずに済むというわけだ。

「セーラにはいつも助けてもらってばかりだな」

「いえ、ご主人様のサポートを行うことが私の役目です。それに、私自身もあなた様のお役に立てる事を心から嬉しく思っていますので」

駅のホームは外界から遮断された地下空間にある。季節は夏だが、外とは違って駅のホームは冷たい空気で満たされていた。

ホームで待つこと数分、トンネルの暗闇の中から二点のライトが姿を現した。徐々に速度を下げ、電車がホームに停止する。

電車に乗り込み、扉のすぐ近くの手すりに捕まる。発車を知らせるけたたましい音がホームに響き渡り、電車の扉が閉まった。

乗り物が動き出すのを体で感じながら、鏡矢は肩につけていたインテリジェント・デバイスを手に取り操作する。

セーラがあらかじめ口頭で情報を教えてくれたが、能力者の現在地を見るなら送られてきたデータの中にあるマップを見た方が早い。指で画面を操作しながら、送られてきたデータの中からマップを探し、クリックする。

「……駅からそう遠くないな。大通りは流石に避けて移動しているみたいだ」

画面上のマップには赤く点滅した点が記されていた。それが時折マップの中を移動する。

「それにしても、どうやってターゲットの現在地をタイムリーで更新してるんだろうな？」

「推測ですが、持ち物が何かに発信機が付いているのではないかと。能力者専門学校は能力者の行動に注意を払っていますから」

「ああ、俺自身がよく知ってるよ。休日以外は学校から外に出させてもらえないからな。まあ、SCGに所属させられてからは大分規制が緩んだけど」

能力者専門学校は文字通り能力者のみを集めた学校だ。

能力者という存在が世間で認知されてから数十年。日本だけでなく世界中に能力者専門学校は設立されている。

そこに属している学生は殆どが学校の寮で生活をさせられている。消灯時間は十時、食事の時間も六時から八時と管理されていて、人によっては施設の整った刑務所のようなと発言する者もいる。

もちろん、能力の使用も厳しく取り締まられている。能力使用が許されるのは模擬戦や能力測定試験の時のみ。例外として学校を取り締まる教師陣とSCGに所属している生徒だけが能力発動許可を出されている。

しかし、設備はどの能力者専門学校も整っていて、不自由に感じる事は少ない。

「神崎はどうやって脱走したんだろうな？ やっぱ軌道迷走を使ったのか？」

「おそらく。軌道迷走なら接近してくる警備員や教師人を近寄らせませんし、能力による攻撃の軌道も逸らせますから」

「だけど、なんでそんな行動に出たんだろう？」

「それは本人に聞いてみるのが一番早いでしょう。電車も、どうや

ら目的地に着きそうです」

気づけば駅を一つ越え、目的駅である瓦河駅が窓の外に見えてきていた。

瓦河の景色は、先ほど鏡矢達がいた街、東原と特に変わりが無い。背の高い建物に、アスファルトの道路、多くの人々、騒音に満ちた空間。

昔鏡矢が過ごしていた場所とは正反対の場所だ。

ふと昔いた場所の景色を思い出す。山に囲まれた村に透き通るような美しい川。竹やぶの中に立つ、趣のある屋敷。

「昔の事を思い出していたのですか？」

不意に掛けられた言葉に、鏡矢は過去の回想を中断する。

「インテリジェント・デバイスの機能に、人の心理を読むという機能はなかった筈だけど」

「私が何年ご主人様に使えていると思っっているのです？ あなた様の表情を見ればすぐに分かります」

「……俺はそんなに分かりやすい奴か」

「はい。それでいて芯が強く、ぶれないあなただからこそ、私はあなたに仕えられる事を誇りに思うのです」

「……芯が強い、か」

セーラの言葉を反芻して、鏡矢は上を見上げる。

建物に囲まれたこの曇天の空の下、昔の自分の様に能力で苦しんでいる奴がいるのなら、助けてやりたい。
その思いを胸に、鏡矢はターゲットの元へと向かう。

神崎綾

大通りから逸れた建物の路地、そこがインテリジェント・デバイスのマップに記されたターゲットの現在地だった。

駅から徒歩で十数分程度の裏路地、鏡矢は現在、一人の人物を前にしている。

「君が神崎綾さんで間違いないか？」

黒く長い髪で、前髪は綺麗に統一されている姫カットという髪型にプリーツスカートの制服。シャツの胸元に刺繍された花びらの中央にSの記されている校章。

全てが送られてきたデータにぴったり当てはまる。強いて違う所があるとすれば、データに記載されているターゲットの写真の表情ぐらいだ。

穏やかで優しそうな写真の様子とは違い、今の彼女は不安や怯えといった感情に侵食されていて、見ているこちらが胸を締め付けられる。

「……わ、私を捕らえに来たんですか？」

警戒している様子を隠そうともしないこと、そしてその答え自体彼女が神崎綾であるということを決定づけた。

「乱暴な言い方をすればそういう事になる。ただ、捕まった所で能力者専門学校の寮に帰されるだけだ。まあ、その後罰則が与えられるのは目に見えているけど」

「私は絶対に帰らない！ 絶対に！」

自分の抱える感情を吐露するように神崎は声を張り上げる。

大通りなら周囲から注目を浴びていただろうが、幸いここは人気のない裏路地だ。

（ここなら能力を使っても問題ないか）

出来れば能力を行使したくない。が、相手がレベルAの能力者となると自分の都合を用意には通す事など出来ない。

しかし、追い詰められている様に見える神崎を能力で強引に屈服させるのは気が引ける。

男としての観点で考えるなら、なるべく女性には暴力を振るいたくないとも鏡矢は思っていた。

「少し質問をさせてもらってもいいかな？」

神崎を落ち着かせるために、鏡矢は彼女へと問いかける。

「……………」

こちらを睨みつける以外何のアクションも起こらない。

鏡矢はそれを了承のサインだと受け取り、会話を始める。

「どうして、君は能力者専門学校から逃げ出したんだ？ 確かにあそこは休日以外外には出れないが、劣悪というよりは良質な環境だと思うけど」

この問いかけに答えてもらわなくても、それはそれで構わなかった。

まずこの質問を行うのは、相手から情報を得るのが本当の目的ではない。相手の警戒心を少しでも和らげ、やり取りをスムーズにする為だ。

能力を使えばやり取りなど必要ないという輩もSCGには存在す

るが、鏡矢はそんな横暴な考え方が嫌いだった。

しかし、神崎は睨みながらも鏡矢の質問に答えた。

「……私は、少し前まで能力が発現しきっていなかった。能力測定ではレベルD評価。せいぜい近くにある物体を動かしたり出来る程度だった。でも」

途端、神崎の表情が悲しげになる。顔を裏路地の地面に俯かせ、彼女は言葉を紡ぐ。

「一週間前に能力が完全覚醒した。扱える力が今までと桁外れで、最初は嬉しさを覚えたけど、次第にその力の強大さが怖くなって。……仲の良かった友達も、接し方がどこか違っていて、不安で溜まらなかった」

完全覚醒を起こした能力者が精神的に不安定になるのは珍しくない。

世界中で確認されている能力者の大半が完全覚醒へと至らずに生涯を終えるため、能力とも上手く折り合いをつけて生活しているが、完全覚醒に至った者の殆どは、最初にその自分が得た力の強大さに恐怖する。

神崎綾も、言ってしまうえばその内の一人でしかない。

「だからと言ってこんな行動を起こした所で意味なんてないだろう？ 君が能力者であるという事に変わりはない」

「分かってる！ 分かってるけど怖かった！ じっとしているだけでも不安が募ってゆく。いつか、この力で人を傷つけてしまうんじゃないかって！」

根が優しいのだろう。その分、人を傷つけたくない、だけど傷つ

けてしまつかもしれないという不安が次第に積み重なっていき、能力者専門学校からの脱走という手段を取った。

だが、それは逆に人を傷つけてしまう可能性を大きくしたただけだ。能力者の多い学校よりも、一般人ばかりの外の方が能力を使った時の被害は大きい。

そう思いながらも、鏡矢はそれを指摘しない。精神的に参っている相手をこれ以上攻め立てても不安や警戒を増幅させるだけだ。

「……君の気持ちは分かった。けど、だからこそ君を迎えに着たんだ。逃げれば逃げるほど、君は自分自身を追い詰めていくからね」
「……………」

神崎の瞳から警戒の色が抜けていくのが分かる。

能力者と言ってもあくまで人間だ。会話を経て問題が解決するということもある。

（今回は、能力を使わずに事が済みそうだな）

こちらにゆっくりと近づいてくる神崎へ微笑を浮かべながら鏡矢は安堵の溜息をつく。

しかし、事態はそう簡単に収拾しなかった。

裏路地に響き渡る、多数の人間の足音がそれを知らせていた。

任務遂行

「あんちゃん達、カップルで喧嘩をするにしても、場所を少し選んだ方がいいんじゃないか？」

振り向くと柄の悪そうな男が三人立っている。そして、神崎の背後、つまりは鏡矢の正面には四人の男が立っていた。神崎と鏡矢は柄の悪そうな男達に取り囲まれたという事になる。

「なあ姉ちゃん、そんな頼りなさそうな男と一緒にいるより、俺らといった方が楽しいぞ？　これから一緒に遊ぼうぜ。ツヒヒ！」

最初に話しかけてきた男は別の人物が、ギリリと目を光らせながら鏡矢と神崎を見る。

どうやら神崎と鏡矢はカップルと勘違いされていて、それを見つけたこの柄の悪い男達は神崎を目当てに絡んできたらしい。

確かに、神崎はルックスを評価するなら間違いなく美少女だ。お淑やかで可憐なその相貌に、目を奪われる男性は少なくないだろう。柄の悪い男達が行動を起こすのも分からなくはない。

鏡矢はそんな男達を見渡して、慌てるでもなく冷静に状況进行分析する。

「おい、あんちゃんよお、何とか言ってみたらどうだ？　もしかしてビビっちゃって、声を出そうにも出せないってか？」

ギャハハハ！　と下品に笑う男達の言葉を無視して、鏡矢は神崎に目を向ける。

囲まれたという事に危機感を覚えているのか、その表情からは焦燥の色が見て取れる。しかし、彼女は能力者の中でも最高ランクに

位置づけされるレベルAだ。男達が接近してきても、その身に宿す能力、軌道迷走を使えば男達は神崎に触れる事さえ出来ない。

（にも関わらずこの様子。やはり彼女は、自分の能力を使って人を傷つける事を躊躇っている）

軌道迷走を使えば、接近してきた男達は動きの軌道をずらされる。本来ならそれだけなのだろうが、ここは狭い裏路地だ。向かってきた人物の軌道をずらさせるとその人物が壁に激突してしまう。

とは言え、その程度なら怪我は悪くても骨折、軽ければ多少の腫れぐらいで済むだろう。身を守るためという理由もあるし、能力者専門学校でもこの状況での能力使用は許される筈だ。

「しかし、姉ちゃんの方は見れば見るほどいい女だよなあ。くつくつく」

リーダーのような男が、神崎へとゆっくり近づいてくる。

あと三、四歩で神崎を掴める距離だ。これなら軌道迷走を発動出来る範囲内だろう。

だが、神崎はただ身を強張らせるだけだった。目を硬く瞑り、スカート裾をぎゅっと握る。

（……あくまで能力は使わない、か）

リーダー格が神崎に触れそうになり、ニヤリと笑みを浮かべたのと同じ時。

二人の間に割って入る黒い影が現れる。

それはリーダー格の男の手を弾き、神崎を守るように背に隠す。

「なっ！？ てめえ！ どうやって割って入ってきた！？」

少し離れた距離にいた鏡矢が突然目の前に現れた事に、リーダー格の男は驚きの声を上げる。

「そんな事はどうでもいい。俺は神崎さんに用があるんだ」
「んだとてめえ！」

激昂したリーダー格の男は、ゴツゴツとしたその腕を遠慮なく振る。相手の事を一切考えない無遠慮なその一撃を、鏡矢はいとも簡単に受け流す。

「!? ……調子に乗んじゃねえぞ小僧が！」

攻撃を受け流され、吼えるようにリーダー格の男が言うと、周りにいた男達も次々と戦いに参戦し始める。

（少々乱暴だが、神崎さんを守る事を優先すれば仕方がないな）

「神崎さん、ちょっと失礼するよ」

「え？ あっ」

鏡矢は神崎を横向きにして抱え お姫様抱っこというやつだ、向かってくる男達の方へと駆け出す。

「死ねえ！」

一人の男が拳に嵌めたそれはメリケンサック。命中すれば骨折は必須な一撃が鏡矢へと迫る。

「悪いな。お前らの相手をしている暇はない」

その場にいる誰もが考えもしなかった動きで、鏡矢はその攻撃を避けた。

攻撃の直前に、右の壁へと軌道を変えて跳躍、右の壁を蹴り、左の壁へ移り、また左の壁を蹴って右に移る。この一連の流れを繰り返し、空中をジグザグの動きで進む。

男達に包囲された状況は崩され、鏡矢は神崎を抱えて路地を駆け回る。

男達が呆然としている間に、鏡矢は常人では考えられないような速度で裏路地を抜けていた。

「ここまで来れば追ってこないだろう」

裏路地を抜けて道をデタラメに走り、鏡矢達は駅前へとやってきていた。

かなりの速さで走っていたにも関わらず、鏡矢は息一つ乱していない。

「……あ、あの、もうそろそろ下ろしてもらえませんか？」

駅前では人の出入りが激しい。そんな場所でお姫様抱っこを未だにされていた神崎は、顔を赤くして身を縮こませる。

「あ、ごめんごめん」

神崎をそつと地面に下ろして、鏡矢は小さく溜息をつく。

「悪かった。逃げる為とはいえ、いきなり抱え込んだりして」

「そんな、気にしないでください。私の方こそ迷惑を掛けてしまいましたし」

神崎の頬は未だに赤い。周りの人物がジロジロとこちらを見てきているからだろう。

鏡矢は一拍間を置いて、神崎に本題についての話を始める。

「男達の乱入で話が飛んでしまったから話を戻そう。神崎綾さん、僕は任務で君の迎えに来た。一緒に来てくれるかな？」

同意を求める必要などないのだが、無理やり連れて行くのはやはり気が引ける。鏡矢は神崎を見つめ、彼女からの返答を待った。

「はい」

短い返答だったが、そこには不満や憤りといった感情は全く含まれていなかった。

未知数の実力

電車に乗った二人は、神崎が住んでいる寮のある能力者専門学校『天草学園』へと向かっていた。

神崎を天草学園に送り届け、SCGに報告すれば鏡矢の任務は終了である。

「それにしても、さっきの壁渡りは凄かったですね。身体能力を向上させる能力があなたの能力なんですか？」

「……うん、まあそんな所かな」

神崎が言う壁渡りとは、柄の悪い男達に囲まれた際に鏡矢が見せた技の事である（神崎が勝手につけた）。

能力について聞かれた鏡矢は、わずかな間を置いて肯定するように頷く。

「羨ましいです。私、運動とか苦手なので、あんな風に動けたらなあって憧れちゃいました。比べて、私の軌道迷走は人を傷つける事しか出来ない能力だから」

鏡矢は気落ちする神崎の肩に手を乗せ、フオローの言葉を掛ける。

「神崎さん、君は少し勘違いをしているみたいだね。軌道迷走は確かに事故などを誘発させる事の出来る能力だ。だけどそれはあくまで悪い考えた方をした場合で、解釈の仕方次第では人を守る事に優れた能力とも取れるんだよ」

「……軌道迷走が、人を守る事に優れている？」

「ああ。例えば、友達に向かって野球ボールが飛んできたでしょう。それはとても速いボールで、友達に知らせたり、かばったりする時

間さえも与えられない。だけど君の軌道迷走なら、そんなボールにも対応出来る。ほら、友達は傷つかなくて済んだ。軌道迷走で人を守る事が出来ただろ？」

「……………」

驚きで言葉も出ない様子の神崎に、鏡矢は言葉を紡ぐ。

「考え方一つで能力っていうのは矛にもなるし盾にもなる。大事なのは心の持ち様だよ。不安もあるかもしれないけど、自分の能力としっかり向き合えば君の想いに答えてくれるから」

「……はい」

次第に神崎の目に涙が溜まっていく。制服の袖でそれを拭い、彼女は満面の笑みを浮かべた。

「流石ですね。レベルAの能力者を捕らえ、無事に天草学園に送り届けるとは」

神崎を送り終えた鏡矢は、SCGの本部へと足を運んでいた。

準司令室にて来栖に報告を終えた鏡矢は、苦笑混じりに来栖へと返答する。

「いえ、俺は何もしていませんよ。聞き分けのいい子で良かったです。もし今回のターゲットが争いの大好きな戦闘狂だったりしたら、俺はここにいなかったかもしれませんから」

「ふふっ。話術もSCGのメンバーには必要な技術ですよ。私のあ

なたへの期待度は先日よりも更に高まりました」

「そんなに期待しないでください。俺はそんな大それた器じゃないです」

「謙遜しなくてもいいんですよ。現に仕事が出来ているんですからね。お仕事、お疲れ様でした」

来栖の言葉に一礼して、鏡矢は準司令室を後にした。

鏡矢の去った準司令室にて、来栖はガラス張りの窓へと視線を向ける。

雲に覆われていた空は、夕方の今はすっかり晴れ上がっている。夕日の光が街中を照らし、橙色の幻想的な空間を作り出していた。静寂に満ちた準司令室にて、来栖は口を開く。

「今回の高天原鏡矢の任務はどんな様子でしたか、天音？」

部屋の片隅に視線を向けると、いつの間にかそこには一人の女が立っていた。

女性用のスーツに身を包んだ彼女、あまねとつか天音凍花は恭しく頭を下げながら発言する。

「はっ。裏路地にて高天原鏡矢が神崎綾を話術にて説得した際、街のゴロツキ数名に取り囲まれていました。その映像がこちらです」

天井からスクリーンが下ろされ、部屋の電気が消える。スクリーンには映像が流れだし、暗くなった部屋の内部を映像の光が照らした。

取り囲まれ、しばらく会話をする鏡矢。その後、リーダー格とおぼしき男と神崎綾の前に鏡矢が現れる。そして神崎綾を抱え、鏡矢は左右の壁を順番に蹴り、凄まじい速さで裏路地を後にした。

そんな映像の一部始終を見て、来栖は興味深げな笑みを浮かべる。

「面白い。やはり君は面白いよ、高天原鏡矢君！ 能力を使わずに任務を遂行するとはね。そんな君の能力を見れる日を、私は楽しみにしているよ。ふっふふふふ」

愉快そうに笑う来栖に、天音は何も言わずにただ頭を下げ続ける。準司令室に置いてある資料のたくさん乗った事務用の机。その真ん中に一つの資料があった。

『高天原鏡矢。能力者専門学校『彩華学園』一年。能力レベルS。しかし、その能力の全貌は不明』

夕日はやがて沈み、街は漆黒の闇へと包まれる。

学生寮

SCGの本部を後にして彩華学園学生寮の近くに帰ってくる頃には、日はすっかり沈んでいた。

「任務お疲れ様です。素晴らしいお手並みでした」

インテリジェント・デバイスであるセーラが鏡矢に賞賛の声を送る。

鏡矢は苦笑しながら首を横に振った。

「自分では、あまり手際が良かったとは思えないな。神崎さん無理やり抱えたりしてしまっただし。……不快な思いをさせてしまったかもしれない」

申し訳なさそうな顔をする主人に向けて、セーラは一つの報告を行う事にした。

「先程、その神崎さんからメールが届きました。音声にて再生します」

メールの文面を把握し、インテリジェント・デバイスに搭載されている機能『記憶音声』にて、記録してあった神崎の声を解析し、神崎綾の声になったセーラがメールの文を読み始める。

『今日はご迷惑をおかけしました。任務とはいえ、不安で一杯だった自分を助けてくれた時はとても嬉しかったです。それに、お姫様抱っこされた時は思わずぽーっとしてしまって……あわわ！ い、今の何でもないです！ 忘れてください！ コホン。えーと、メー

ルの用件なのですが、今日の事の謝罪に加えてもう一つ。一週間後の土曜日に西ノ宮でお会い出来ないでしょうか？ つ、都合が悪いのでしたら無理にとは言いません。お返事を待ってます。最後に、ありがとうございます。柄の悪い人達と戦っていた時の、鏡矢さん、か、かつこよかったです！』

「……………」

嫌われていなかった事への安堵、加えて何とも言えない気恥ずかしさから、沈黙の後に鏡矢は咳払いをする。

「以上がメールの文面です。嫌われる所か、とても慕われていますね」

「セ、セーラの記憶音声は相変わらずすごいな。まるで本人が話しているようだったぞ」

話をずらす為に、鏡矢はパートナーの能力へと話題を移した。

記憶音声は簡単に言ってしまうと、セーラが神崎の声を真似て話しているに過ぎない。だが、そこはあくまで機械なので、本人の声との一致率は九十九、九%。録音再生でいいのではないかと思われるかもしれないが、記憶音声は電話の録音だけでなく先程のようにメールの文面を音声として再生出来るという利点があるため、インテリジェント・デバイスを持つ者の多くはこの機能を好んで使用している。

「お褒め頂きありがとうございます。話を戻しますが、ご主人様は神崎さんの申し出を承諾するのですか？ ちなみにですが、来週の土曜には何の予定も入っていません」

暗い夜道を歩きながら考えて、鏡矢はセーラの質問に返答する。

「……承諾する事にするよ。土曜に予定が入らないよう、SCGにメールを飛ばしておいてくれ」
「かしこまりました」

しばらく道を進むと、やがて彩華学園の校門が見えてくる。
その門をくぐり、鏡矢は右、左、真っ直ぐに分かれた道の内、右へと進路を取る。

真っ直ぐ進めば校舎等の学業専門の施設があり、左右の道は彩華学園に所属する学生の寮へと繋がる道となっている。

左は女子寮。右は男子寮。基本性別の違う者が寮に入るのは禁止されているため（教師や寮での仕事を任されている大人は例外）、生徒の間で間違いが起こる心配も無い。

もともと、当の学生達はそれに不満を覚えているのだが。

彩華学園の敷地は広大だ。校門から学生寮までに掛かる時間は五分から七分。休日などで外に出ていて、門限ぎりぎりに校門に辿り着いたのでは学生寮まで間に合わない。

しかし、SCGのメンバーに選ばれた鏡矢はその門限時刻が他の生徒に比べて一時間遅めの七時に設定されている。

現在の時刻は六時十分。普通なら門限破りな時刻に鏡矢は堂々と男子学生寮へと入っていく。

靴を脱ぎ、下駄箱へと閉まって上履きに履き替える。玄関傍にある階段を登り、最上階にある自分の部屋へと鏡矢は向かう。

途中、階段ですれ違う男子生徒がこちらを見ていたが気にしない。最上階に辿り着き、廊下の奥へと進む。手前から四番目の部屋、504号室が鏡矢の部屋だった。

「ただいま」

誰に言うでもなく呟き、鏡矢は部屋の中へと入る。

部屋は一つにつき二人が共同で住む相室となっている。が、504号室には鏡矢しか住んでいないため、本来の機能をその部屋は發揮していない。

帰ってきてからする最低限の事を済ませ、鏡矢はすぐさま二段ベツドの下の段へと潜り込む。

「ご主人様。着替えはなさらないでいいのですか？」

「ああ、三十分程度睡眠を取るだけだ。時間になったら起こしてくれるか？」

「承知いたしました」

セーラの上承を得て、鏡矢はゆっくりと瞳を閉じる。

意識は、だんだんと暗闇の中へと落ちていった。

衝突

暗い竹やぶの中を、一人の少年は進んでいた。

人の姿はどこにも見受けられない。少年が地を踏みしめる音だけが耳に聞こえる。

少年は立ち止まろうとせず、ただ前へと進み続けた。辺り一面が竹やぶという変わり映えない景色の中を一步一步進んでいく。

そんな時が風景の中を、一体どれくらい進んだか。遠目にとある建物が見えてくる。

それは、立派な屋敷だった。かやぶきで作られてた屋根に入り母屋造りの建築という、趣のある屋敷である。

入り口の左右には火が灯されており、一部の空間を明るく照らしている。

入り口には一人の女性が立っていた。少年はその女性の元へ駆け寄り、ひしつと体に抱きついた。

髪を三つ編みにした女性は少年の頭を撫でながら、優しく声を掛ける。

「おかえりなさい。鏡矢」

「ご主人様。そろそろお時間です。起きてください」

セーラの声で鏡矢は目を覚ました。鏡矢はベッドから体を起こして欠伸を一つ零す。

枕元の時計へ視線を向けると、時間は七時十五分を指していた。

「起こしてくれなかったのか？」

三十分後に起こしてくれと頼んでいたが、鏡矢が眠りについて既に一時間経過している。

不満や怒りと感情などなしに、ただの疑問として鏡矢はパートナのセーラへと尋ねる。

「はい。気持ちよさそうに寝ていらしたので。夕食終了時間である八時まで四十五分あります。ご主人様が食事を完食なさる時間は平均で二十分なので問題ありません」

セーラが睡眠時間を延ばしたのは鏡矢を気遣ってくれたがゆえだ。今日の任務で多少ながら疲労していた鏡矢だが、一時間睡眠を取ったら疲労感が消えていた。

思いやりのあるパートナに鏡矢は微笑みかける。

「……そうか、気遣ってくれてありがとう」

ベッドから下りて洗面所へ向かい、手早く顔を洗う。

服のしわを整えて、鏡矢は食堂へ向かうために部屋を後にした。

食堂は五階建ての男子寮の三階にある。どの階からも行きやすいようにと配慮されて作られた食堂は大勢の生徒を導引しても大丈夫なように広く作られている。

食堂へと足を踏み入れると、食事を済ませたのであろう男子生徒達とすれ違う。楽しそうに談笑する彼らを横目に、鏡矢は券売機の前に歩みを進める。

醤油ラーメンとかかれたボタンを押し、小さい画面に表示された金額の小銭を入れる。出てきた食券を手に取り、カウンターにいる女性へとそれを渡す。

一分後には醤油ラーメンが運ばれてきた。受付の女性に一礼して、

鏡矢は端の席に腰を下ろす。

鏡矢はパチンと割り箸を割って両手を重ねた。

「いただきます」

食への感謝を忘れず、鏡矢は醤油ラーメンにありつき始めた。

麺を啜りながら、周りに視線を移してみる。終了時間三十分前だからか生徒の姿はまばらだった。

「おい、お前。そこは俺の席だ。さつさと別の席に移れ」

声の方向はこちらへと向けられている。そして、自分の周りには一人も生徒はいない。

以上の事から自分が呼ばれているのだと理解し、鏡矢は声の方向へと目を向ける。

筋肉質な体つきの男性が少し離れた位置に立っていた。上履きを見ると、二年生を意味する黄色のラインが入っている。その男はずんずんとその場から移動して鏡矢の傍らに立った。

箸を動かすのを止め、租借していた物を飲み込んで鏡矢は答える。

「席はたくさん空いてますよ。他の席に座ったらどうですか？」

「ああ？そこは俺の特等席なんだよ。つかてめえ一年生だろうが。上級生に生意気言ってんじゃねえよ。どけて言ったらどけ！」

面倒なのに絡まれたと内心で思いながら、気にせず箸を動かして麺を啜る。

上級生だからといってどいてやる必要はない。先に座ったのは鏡矢なのだから、後に来た男が別の席に座れば済む話だ。

そんな鏡矢の態度に憤りを覚えた上級生は、座っている鏡矢の胸倉を掴み、無理やり立ち上がらせる。

「喧嘩売ってんのか？ ガキが調子こいてんじゃねえぞ！」
「……………」

臆する事なく、静かに鏡矢は上級生の男を見据える。

青筋を立った上級生は、胸倉を掴んでいないもう片方の手で鏡矢に殴りかかった。

しかし、その拳が鏡矢を捉える事はない。

足払いで体勢を崩され、拳の軌道がずらされる。鏡矢は空振ったその腕を右手で掴み、右側に強く捻りを加えた。

「いててててて！」

情けない声を上げる上級生。鏡矢はどんどん加える力を強めていく。

「わ、悪かった！ 俺が悪かったからその腕を放してくれ！ ひ、引き千切れるうつつ！」

言われた通り手を離すと、上級生は地面に尻餅をついた。慌てて体勢を立て直し、

「お、覚えてろよ一年坊主！」

そんな捨て台詞を吐いて食堂を去っていく。

（……………食事していかなくて良かったのか？）

何の為に食堂に来たのかよく分からない上級生を見送って、鏡矢は椅子に座り直す。

「いや、中々の手捌きだった。上級生相手に良い度胸してるな」

振り向くと、うどんの乗っているトレイを持った男が立っていた。ツンツン頭に勝気な瞳、それでいて人懐っこい笑みを浮かべるその男は、鏡矢に許可を取らず正面の席に座る。

「俺の名前は村雨樹。むらゆめいつき お前とおんなじ一年生だ。よろしくな！」

「……高天原鏡矢だ。よろしく」

差し出された手に応じるように、鏡矢は村雨と握手を交わした。

申し出

「高天原って、入学して一ヶ月でSCGに引き抜かれたあの高天原だよな？ そんなに多い苗字でもないし、本人って事で間違いないよな。そんなすげー奴が自分の目の前にいると思うと、なんだか不思議な感じだぜ」

握手を終えてすぐの一言だった。麺を啜ろうとしていた鏡矢はピクリと動きを止める。

「すごいと言われるような事は何もしていないよ」

「いやいや、SCGに引き抜かれる事ってかなりすげー事じゃん。しかも高校入学から一カ月後だろ？ 同学年の奴からしたらお前は化物だぜ」

SCG、能力者統率組織に所属する方法は二つある。

一つはSCG選抜テストに合格すること。

一つはSCGの幹部に実力を認められて引き抜き、つまりはスカウトされること。

大抵の人物は前者のケースでSCGに所属する事になる。しかし、前者は高校三年生以上でないと受けられない上に競争率も高い。尚且つ筆記試験、実技試験の難易度は鬼の様に高く、最終的な合格者数は全体の0.2%とかなり少ない。

鏡矢はこの前者ではなく、後者のケースにてSCGに所属する事になった。前者に比べれば簡単そうではあるが、SCGの幹部に認められるというのにはある意味前者の選抜テストよりも難しい。

更に高校一年生という若さでのSCG所属は前代未聞だった。そんなレアケースである鏡矢の名は彩華学園に広まっていて、彼の名前を知らない生徒はいない（顔を覚えられているわけではないので、

先程みたく上級生に絡まれるような事が起こる）。

「……随分な言われようだな」

化物扱いされた鏡矢は苦笑混じりに返答する。

「表現だよ表現。化物みたいにすげーって事さ。ところで、SCGに引き抜かれるって事はよっぽどすごい能力が使えるって事なんだろう？ 高天原ってどんな能力を使うんだ？」

「……えーと、それはだな……」

答えずらそうに鏡矢は村雨から目を逸らす。

「さ、先に村雨の能力を教えてくださいませんか？」

「？ まあ別にいいけど。俺の能力は剣刀性質^{ソイド・ブレイド}。物体に剣や刀と同じ力を付与させるつつうもんなんだ。例えばこれ」

すつと前に出してきたのは割り箸。その割り箸が、徐々に淡い光を帯び始める。

村雨が光を纏ったそれをテーブルの角に当てて力を加える。パキツとテーブルが小さく音を立て、角の部分には鋭い切れ込みが入った。

「切れ味だけじゃなく、硬度も剣や刀と同じに出来るから本物の剣や刀とも打ち合える。俺は結構この能力、気に入ってるんだ」

「ランクはレベルBって所か。どちらかと言えば強力な能力だけど、戦いになれば本人の腕次第だろうし」

「大正解だぜ。レベルをぴたりと当てるなんて、やっぱりお前、すげー奴じゃん」

淡い光が消え、武器となっていた割り箸は元の役割を果たす道具に戻る。

村雨は割り箸でうどんを掴み、豪快に啜った。

「さあ、次はお前の番だぞ。早く教えてくれ！」

爛々とした目で見つめられ、鏡矢は戸惑いの表情を浮かべる。

（どう誤魔化そうか……）

自らの能力を他人に話すなんて鏡矢には考えられなかった。もしそれがただの”能力”と言えるものなら、鏡矢も教える事を躊躇する必要などないのだが。

数秒間考え込み、鏡矢は重い口を開く。

「俺の能力はスキルアップ動力操作。身体能力を高める、ただそれだけの能力だ」

今日の任務のターゲットであった神崎が鏡矢の能力をそんな風に解釈していたのを思い出し、鏡矢は今思いついた適当な能力名、および能力の簡潔な説明をした。

「へえ、あんまりぱつとしない能力だな。けど、それでSCGに引き抜かれたって事は、相当身体能力を高められる能力なんだな」

村雨はごくごくと勢いよくスープを飲み、音を立てて中身の空になった器をテーブルに置いた。

「そこで提案なんだけど、明日俺と模擬戦をやらないか？」

「……え？」

予想外な言葉に、鏡矢は動かしていた箸を止める。

「俺さあ、強い能力者と戦うのが大好きなんだよ。中等部の時とか放課後に体育館に通い詰めて、模擬戦ばっかやってたんだ。お前は間違いなく強いだろうから、もううずうずしちまって」

「強さを勝手に決め付けられてもなあ」

「で、模擬戦やってくれるのか？ やってくれるのか？」

「……やらないという選択をさせる気はないんだな」

鏡矢の言葉に返答はない。しかし、今浮かべる笑みがその答えを表していた。

小さく溜息をつき、渋々首を縦に振る。

「よっしゃ！ じゃあ明日の放課後に第三体育館で待ってるからな！」

席を立ってトレイをカウンターに置いて、村雨はとっとと走っていつてしまう。

時計の時刻は七時五十分。ラーメンの量は食べ始めた時とあまり減っていないかった。

急いでラーメンを食し、七時五十八分に鏡矢は食堂を後にした。危つく規定時間を過ぎてしまう所だった。部屋に戻ってきた鏡矢は部屋着に着替え、椅子に腰を下ろしている。

勉強机の上に置かれたインテリジェント。デバイスのセーラは画

面を点滅させながら主に声を掛けた。

「今日は忙しい一日でしたね、ご主人様」

「ああ、せっかくの日曜日が一つの任務で台無しだ」

背もたれに寄りかかり、鏡矢はゆっくりと息を吐き出す。

「しかし、その任務のおかげで来週の土曜日が楽しみになったのではないですか？ そう考えれば、こういった休日の過ごし方も悪くないのではないのでしょうか？」

「……そうだな。そう考えると気分もまた違ってくる」

神崎と会う約束をしている事を思い出して、鏡矢の気分は少し晴れやかになる。

一週間後の休日を楽しみにしながら、鏡矢は窓の外へと視線を移した。

そこに広がるのは漆黒。道に沿うように置かれている少数の電灯だけが、その暗闇の中で輝いていた。

模擬戦

翌日。月曜日を迎えた学生達は校舎へと足を運んでいた。

鏡矢もちろんその中に混じっている。所属しているクラス、一年二組の自席に腰を下ろして授業を受けていた。

「人が超能力に目覚める理由は未だによく分かっていません。現在分かっているのは、能力に目覚めたとしても脳や身体に変異が起きているわけではないという事です。皆さんも知っているでしょうが、能力には様々な種類が存在します。細かく分けるのなら物理攻撃能力や自己防衛能力といった感じに呼び方が変わってくるのですが、それについての詳しい説明はまた別の授業で行う事にしましょう。能力者に与えられているランクがどのような基準でつけられているかということ」

教壇に立ち、能力についての説明をする担任の話は鏡矢は聞き流していた。

空中に出現している仮想画面をぼんやりと眺めながら、担任の話をただの音として聞き続ける。

「このような基準で能力者のランク付けが行われているわけです。ただ、稀に例外としてレベルAよりも上と評価される、レベルSという判定を下される者もいます。レベルSに至る能力者についても研究中で、他の能力者との違いなどを調べているそうです」

担任がちらりと鏡矢へと視線を向けた。能力判定結果を知っている教師陣は、その例外たる高天原鏡矢に少なからず興味を示している。

鏡矢はその視線に気づいているのか気づいていないのか、ただ仮

想画面に表示される黒板の文字を眺めている。

「能力研究は時が経つと共に進んできていて、現在は人工的に能力者を作りだせる段階へと至っているようです。しかし、人工的に能力者を作り出す事に反対する声や、その際に背負う事になるリスクを取り払いきれない事から」

（人工的に能力者を作りだす事に、一体何の意味があるのだろうか？）

画面に表示されていく字を読んで、鏡矢は能力開発への疑問を抱く。

ただ日々を幸せに過ごすのなら、能力だなんてものは必要ない。家族との温かい一時、恋人との幸せな時間、友人と過ごす賑やかな空間。能力が無くたって、人々は幸せに暮らしていける。

逆に、能力を持った事で心に傷を負い、不幸になる人物が何人いるだろう。

世間に能力者という存在が認知され、それなりに時間が経つ。ゆえに昔に比べれば一般人と能力者の隔たりはほぼ無くなったと言ってもいいだろう。

しかし、今でも一部では能力者を軽蔑する者がいる。

自分達とは違う者に対する畏怖や軽蔑、嫉妬。これがきっかけで、家庭や友人との関係が壊れてしまう。一昔には、そんな事が少なからず起きていた。

担任の声はやや高揚気味で、能力を語る声は若干高くなっていた。鏡矢はもうその声を聞くことも、仮想画面を見ようとしめない。

ただ、授業が早く終わらないかと、真正面にある時計へと視線を移した。

学園内での能力は原則禁止とされているが、そのルールを唯一適用せずに済む場所がある。

敷地内に六つ設けられた体育館。模擬戦を行う場として使用されるそこでは、学生達が存分に能力を揮えるようになっていく。

その第三体育館に、鏡矢は放課後呼び出されていた。校舎から五分掛かる道中、鏡矢はセーラに話しかける。

「なんで俺は模擬戦の申し出を受けてしまったんだろう……」

「ご主人様は優しいですから、相手の気持ちを考えてしまつて自分の気持ちを後回しにしてしまうのでしょうか。それは裏を返せば、押しに弱いという事なのですが」

「……………」

パートナーの正論に鏡矢はガクリと肩を落とす。

体育館の近くまで行くと、賑やかな人の声が聞こえてくる。皆考える事は同じ様で、体育館の中にはそれなりの数の生徒が入っていた。

体育館は四ブロックに区切られていて、そのエリアの中で生徒と生徒が能力を使って戦いを繰り返している。

（怪我を心配したりはしないのか？）

保健室の先生は皆人の傷を癒す能力を持っているので、怪我をしてもすぐに傷は治るのだが、怪我はしないに越したことはない。

「おーい！ こっちだこっち！」

聞き覚えのある声が鏡矢へと飛んでくる。模擬戦の順番待ちと思

われる列に村雨は並んでいた。

列に加わると、村雨が嬉しそうに鏡矢の肩に手を置く。

「お前と戦えるのを楽しみにしてたぞ！ おかげで昨日の夜は寝付
けなかったぜ」

無邪気な笑みを浮かべる村雨と、複雑そうな表情を浮かべる鏡矢。
そんな正反対な二人の模擬戦が、徐々に、ゆっくりと近づいてい
く。

ソード・ブレイド

出番のやってきた鏡矢と村雨は、エリアの中央へと移動する。すると、その中央に二つの仮想画面が現れ、二人が彩華学園の生徒であるかをデータで調べ上げていく。

『高天原鏡矢、村雨樹、両名がこの学園の生徒であるという結果が出ました。模擬戦を許可します』

機械的な声がエリアに響き渡る。仮想画面が消え、エリアの端に時間が表示された。

『制限時間は五分。時間以内に決着がつかなかった場合、よりダメージを受けているものが敗者となります』

エリア内に響く声の説明を聞いて、村雨はにと笑みを浮かべる。

「手加減なんてしないでいいぜ！俺も全力でやらせてもらうからな！」

「……お手柔らかに頼むよ」

『それでは、試合スタート！』

試合を知らせる声がエリアに響く。

後ろで列に並んでいる生徒達も、暇つぶしにと何人かエリア内で行われようとしている模擬戦へ目を向けている。

そして、試合が始まった時に鏡矢はふと疑問を抱いた。

「村雨、お前の能力は物が無いと使えない能力だろ？何も持たな

くていいのか？」

村雨の能力、剣刀性質は物体に剣や刀と同じ力を付与させるという能力だ。割り箸やシャープペンといった物が剣や刀になるのだから恐ろしい能力だが、村雨はその媒体となる物体なるものを手に何も持っていなかった。

「高天原、俺は確かに物体に力を付与させるつつた。けど、物体を持っていないと使えないとは一言も言っていないぜ？」

「？　どういう事だ」

「つまり、こういう事だ！」

村雨の腕に淡い光が灯った。腕の縁を流れるその光は、昨日物体へと力を付与させた時に発生した光と同じ色。

その腕を振るい、村雨は数メートル離れた鏡矢の元へと駆ける。

「なっ！？」

「油断禁物だぜ！　おらああああ！」

反応が遅れた鏡矢の胴体目掛けて、剣と化した腕が迫る。攻撃を受け流そうとせず、地面を強く踏んで鏡矢はバックステップを行う。その動きのみで、村雨との距離が大きく開いた。

「やっぱりすげー！　ただのバックステップじゃ数メートルも距離を離せないものな」

村雨の言葉に返答せず、目の前に立つ能力者の力量を測る。

（突きの動作に一切の無駄はなかった。おそらく剣や刀自体の扱いに慣れているんだろう。体の一部である腕なら尚更だ）

そして、昨日村雨がわざわざ割り箸に能力を付与させて説明をした時の事を鏡矢は思い出す。

（腕にも力を付与させる事が出来るのなら、最初から腕で俺に能力の説明をすれば良かったはず。あれが最初から模擬戦を視野に入れた事で、能力の誤認を生じさせるための仕込んだたとするなら、こいつは中々強かだ）

相手の目を見据え、鏡矢は村雨を評価する。

「じゃあ次の攻撃、行くぜ！」

村雨は体勢を低くして、地面を滑るように走る。

そしてその時、村雨の片腕、両足にも光が灯るのを鏡矢は見た。

「喰らえ！ 村雨流剣技、乱れ桜！」

突き出された右腕を交わした時、逆方向から鏡矢へと左足が接近していた。

間一髪でそれを避けても、すぐに上から左腕が振り下ろされる。四本の刃が、乱れるように鏡矢を襲う。

（文字通り『手刀』というわけか。足にまで付与が可能とは）

が、鏡矢は冷静にその一つ一つを避けていく。まるで全ての攻撃の軌道が見ているように。

そして、わずかに隙の出来た胴体へと鏡矢は拳を放った。

「がはっ！」

放たれたそれは風を切り、村雨の腹へと命中した。後方へとわずかに飛ばされて、村雨は腹部を押さえながら膝をついた。

「た、ただのパンチが、お前の能力だとこんなに威力が上がるのかよ」

能力が動力操作だと信じている村雨に、鏡矢は苦笑気味に返す。

「まあ、俺からすれば、お前の能力の方が羨ましいけどな」

その言葉を聞いて、村雨はついていた膝を起こし、立ち上がる。エリアの端に表示された時間は、残り三分を切っていた。

模擬戦、決着

「はあああああ！」

腹部へのダメージをもとせず、村雨は鏡矢へと向かってくる。淡い光を伴った腕や足が、獲物を捉えんと乱れるように振るわれる。

（これがただの素手なら、受け流してすぐに攻撃に転じられるんだが）

剣刀性質で剣や刀と同じ力を付与された腕や足を受け流すのは容易ではない。刃物を素手で受け流そうとすれば、その刃が体に切り傷を作る。

攻撃を無駄なく交わしながら、決定打の機会を鏡矢は窺がっていた。しかし、手数が多さと洗練された動きに中々隙を見出せないでいる。

入学して何度か能力者と模擬戦を行った事はあるが、これほどの使い手はいなかった。殆どの生徒が能力自体に頼り切っていたため、接近戦になった際に何も出来ずに敗北していたのである。

だが、村雨は違う。体の動き、剣の扱い方を理解しているがゆえに、剣刀性質という能力が余す事なく発揮されていた。

「ははっ！ 強え奴と戦うってのはやっぱり楽しいな！ 体の底から力が湧いてくるぜ！」

「！」

攻撃の速度が跳ね上がる。先程までは余裕をもって交わせていた攻撃が頬を掠めた。

(……様子をいつまでも見ているわけにはいかないか)

模擬戦には気乗りしていなかった。しかし、相手がこれだけの使い手なら、力を温存しておくのは失礼な事な気がした。

それに、鏡矢だつて負ける事が好きなわけではない。

鏡矢は短く息を吐き、村雨の手刀を後ろにバック宙返りで交わす。数メートル離れた距離に着地しようとしている鏡矢から村雨は目を離さなかった。すぐにでもまた攻めて、あの超人に一撃入れてやると、そう考えていた。

だが、村雨は結果として鏡矢を視線からはずす事になる。地面に着地した鏡矢は、その直後に姿を消したのである。

「!？」

信じられない事が目の前で起こり、村雨は驚愕する。

そして、目にも止まらぬ速さで移動した鏡矢は、硬直する村雨の背後を取っていた。

トン、と首に手が振るわれる。首に衝撃を受けた村雨は何も言わず、ゆっくりと膝について地面に倒れこんだ。

エリア中央には大きく『高天原鏡矢、WIN』の文字が表示される。

今の戦いを見ていた学生達は高天原の見せた動きを見て、ざわざわと話をし始める。

「おい、なんだよあの動きは!」「あいつってSCGに引き抜かれた高天原だったのか!？」「ふん、どうせ能力で身体能力を高めたんだろ」「それでもあれは十分すげえぜ」

そんな生徒達の前を気絶した村雨を抱えながら鏡矢は歩く。

（周りに俺の能力を勝手に解釈してもらえるのは正直助かる。模擬戦の申し出を受けて正解だったかもしれないな）

安らかな顔をして眠っている元対戦者に、鏡矢は自然と微笑を浮かべていた。

「あゝ、悔しい〜！ 強えのは分かってたけど、それでも負けるのは悔しいぜ！」

保健室に運ぶ前に村雨が目覚めたため、現在は敷地内に設けられたベンチに鏡矢と村雨の二人は腰を下ろしていた。

「村雨は十分強かったよ。俺が戦った中では間違いなく上位に位置づけされる強さだった」

「へん！ 褒めてもらわなくたって結構だ。結局、勝てなきゃ意味なんてないんだからな！」

「……ふふっ」

子供のように拗ねる村雨を見て、思わず鏡矢は笑ってしまう。

「あ！ 今笑っただろ！ 子供っぽいとか思っただんだろ絶対！」

「すごいな。読心術でも身につけているのか？」

「そんなもんなくても大体分かるんだよ！」

そう言っただけで村雨は鏡矢の頭を軽く叩く。

「いや、悪い悪い。久々に楽しかったから、つい笑ってしまった」
「まあいい。次戦う時はさっきみたいにはいけないからな！」
「はいはい」

彩華学園の敷地内を夕日の紅色が染める。

ベンチに座り、楽しそうに（傍らの人物はムキになって）話しているその二人は、傍からすれば仲の良い友人のように見えた。

瓜生奏

村雨との模擬戦から二日後、鏡矢は今日も授業を受けようと校舎へ向かっていた。

荷物らしい物を鏡矢は手に持っていない。自分の座席に鏡矢専用のIDを入力すれば、教科書や黒板に書かれた文字などのデータが引き出せるようになっていたため、わざわざ教科書やノートを持っていく必要がないのである。

小さく欠伸を漏らし、鏡矢は朝日の降り注ぐ敷地内の道を歩く。

「ご主人様。準指令官である来栖さんからメールが届きました。音声にて再生しますか？」

そう話しかけてきたのはインテリジェント・デバイスであるセーラだ。主である鏡矢にセーラは画面を点滅させながら指示を仰ぐ。

「ああ、よろしく」

言いながら、鏡矢はこれが任務を知らせるためのメールだろうと検討をつける。来栖から送られてくるメールは、十中八九任務絡みのメールだという事を知っていたからだ。

セーラは『記憶音声』でメールの文を再生し始める。

『おはようございます。朝早く申し訳ありませんが、君に任務が入りました。今回の任務は複数の能力者を相手取るらしいので、くれぐれも気をつけてください。詳しい情報はメールと一緒にデータで送ってきましたので。それでは、任務頑張ってください』

メールの再生が終わったのを確認して、鏡矢は深く嘆息する。

「……なんで来栖さんは難易度の高そうな任務ばかり俺に与えてくるんだろっな？」

「本人も言っていた通り、あなた様に期待なされているんでしょう。喜ばしい事ではないですか」

「そりゃそうだけど……」

鏡矢が言わんとしている事をセーラは察し、それについて返答する。

「例え相手が能力者でも、あなた様がわざわざ『朱い月』を使う必要などありません。周りが能力だと勘違いしてしまう程の身体能力があれば、それだけで十分任務を遂行出来ます」

「……………」

鏡矢は返答しなかった。長く一緒にいるパートナーの言葉でも、こればかりは不安を拭いきれない。

セーラも、それ以上は何も言わなかった。

任務が入ってしまったため、校舎へと向けていた足取りを彩華学年の入り口方向へと向ける。

授業の単位についてはSCGに所属されている時点で満たされる事になっているため、いくら授業をサボろうが留年という事にはなり得ない。だが、真面目な鏡矢はなるべく学生として授業を受けておきたいと思っていた。

担任に任務だという旨をメールで伝え、鏡矢は校門を目指す。

その道中、女子寮の方から駆けてくる女の子に目が行った。その子はどんどんこちらに向かってきて、鏡矢の前で立ち止まる。

「おっはようカガミン！ 校舎と反対側に歩いているという事は、まさか学校を抜け出してお忍びデートだったりするのかな！」

セミロングの髪を揺らしながら、ビシッと鏡矢に人差し指を向ける女の子に鏡矢は微笑み掛ける。

「相変わらずテンションが高いね、瓜生さん」

「そりやそうだよ！ 明るい事が奏ちゃんの良い所だもん！」

ハイテンションな少女、うりゅうかなで瓜生奏は屈託のない笑みを浮かべる。

「それはそうと、質問に答えてないよカガミン！ 相手はどんな子？ 黒髪ロング？ 金髪碧眼？」

「残念ながら、デートをするような相手は俺にはいないよ。さつき面倒な事に任務を与えられちゃってさ。これから行かないといけないんだ」

「SCGのメンバーは大変だね。というか、それよりも奏ちゃんはカガミンに彼女がいない事にびつくりしたよ！」

「そんなにびつくりするような事かな？」

「事だよ！ カガミン結構カッコイイもん。奏ちゃんが彼女に立候補したいぐらいだね」

「あはは、そういつてもらえるのは嬉しいけど、奏ちゃんは俺なんかを当てにしないでいいんじゃないかな？」

瓜生と鏡矢は同じクラスだが、鏡矢はクラスの男子達と瓜生が仲良さそうに話しているのを何度か見ている。その男子生徒達が友達として瓜生を見ていないという事も、傍から見ればよく分かる。

「ガーン！ さりげなく断られた！ 鏡矢君は私の事が好みじゃないんだね！？」

「あ、いや、そういうわけじゃないけど」

「じゃあ、私にもまだ望みはあるんだね！？ よし、なら頑張れる

！ カガミンは任務頑張ってね〜！」

まるで嵐のように来て、去っていく少女の後ろ姿を見ながら、鏡矢は静かに呟く。

「……カガミンってネーミングはどうにかならないのかな」
「私は好きですよ。カガミンというネーミング」

話の一部始終を聞いていたセーラは、主の呟きに答えた。

二人の間にわずかに生じた沈黙は瓜生の介入によって解消された。
二人は口にしなないながらも、明るい彼女に感謝の気持ちを抱きながらその場を後にする。

足取りは、先程に比べれば幾分軽くなっていた。

攻略

東原駅へと向かう道中、鏡矢はセーラから任務についての情報を聞いていた。

「今回の任務は植山にある第三鉄鋼工場跡地で行われると言われている麻薬取引を阻止し、売人および買手の人物達を捉えるものです。能力者の情報についてですが、売人として上げられている三人の人物が全員能力者だそうです。ランクはレベルBが二人、レベルCが一人。レベルCの人物に限っては探知能力を備えているらしいです。つまり、残りの二人が戦闘要員ですね」

「……これだけの任務を俺一人に任せているのか？」

「事実、そういう事になります。探知能力のせいでSCGの作業員を配置する事が出来ないとの事なので、単身でご主人様が第三鉄鋼工場跡地に潜入し、戦闘にて全ての人物を昏倒させる事がデータには推奨されています」

「……………」

思わず鏡矢は頭を抱えなくなる。

強者揃うSCGのメンバーが探知能力で配置できないのなら、新人である鏡矢に単身潜り込む事なんて出来る筈がない。どうやって途中で気づかれて、さっさと他の入り口から逃げられてしまうのがオチだ。

「セーラ、どうすれば探知能力者に気づかれず取引場所に潜り込めると思う？」

パートナーであるセーラに意見を仰ぐ。画面を点滅させながら、セーラはデータの情報を導入しながら答える。

「探知能力者の詳しい情報を述べさせていただきますと、その能力者、たじまじゅうじ田島十寺フィールド・サーチが使う能力は周囲探知。自らの周囲五十メートルに入ってきた人物の存在を感知する能力です。ただ、戦闘能力や移動能力は皆無なため、能力者同士の戦闘には向いていません。しかし、麻薬密売のような察知能力を必要とするものに関しては脅威かと。データに推奨されているやり方であるご主人様の身体能力で五十メートルの距離を早々に埋め、戦闘にて鎮圧させるの方法は無理があると思います。攻略法に関しては考え中です」

難易度の高い任務を与えられて憂鬱な気持ちを抱きながらも、鏡矢は探知能力者攻略について冷静に思考する。

セーラの話聞く限り、敷地内に足を踏み入れた段階でこちらの存在を知られてしまうだろう。そうなれば逃走という手段を早い段階で行われ、任務は失敗に終わってしまう。

やはり探知能力を持つ能力者が厄介なのだ。例え透明化するような能力を持っていたても、存在を認知されてしまう探知能力の前では意味がない。つまり、侵入する際に小細工は殆ど無駄であるという事を示している。

探知能力攻略について考え込んでいる内に、東原駅が見えてきた。信号を渡りながら、思考を一旦中断して第三鉄鋼工場までの行き先をパートナーに尋ねる事にする。

「第三鉄鋼工場のある植山は、東原からどれくらい乗り継ぐんだ？」
「東原ラインに乗り込み、松野時にて久里浜ラインに乗り換えて三駅で植山に到着します。第三鉄鋼工場は植山駅から徒歩二十分の距離にあります」

「ここから一時間ぐらいって所だな。取引の時間よりは早く着く」

探知能力の距離が五十メートルと分かっているなら、それよりも

外のエリアで張り込んでいれば問題ない。

交通機関パスを改札に通して駅へと鏡矢が入った瞬間、セーラが画面を点滅させた。

「ご主人様。探知能力者の攻略法ですが、考えを思いつきました」

パートナーのその言葉に、鏡矢は喜びをわずかに滲ませて返答する。

「考えを聞かせてくれるか？」

「はい。データには買い手であるメンバーの数は書かれていませんでした。もし正確なメンバーの数が決まっているのなら、データに記載されているはず。つまり、売人達も買い手の数を把握していない可能性があります。元々、買い手とは別の反応を探知出来ればいいので、売人が買い手の人数を把握する必要がないからです」

「それと探知能力攻略には関係性があるのか？」

今セーラが言った通り、結局、買い手、自分達の二つの反応が発見されたら終わりだ。これのどこに攻略法が隠されているというのか？

セーラは自らの攻略法を主に説明し始める。

「はい。二つの反応が起きてしまうのなら、その反応の一つにしてしまえばよいのです」

「二つの反応を一つに？」

意図がよく分からない鏡矢は、セーラの言葉をそのままぞろ。

「ええ。詳しい攻略法を説明させていただきますと」

駅の中を行き交う人々の中、セーラから攻略法を鏡矢は、

「……なるほど。その方法があったか。しかし、これはこれで実行が難しいな」

「私達は早くに現地に着く事になるので十分可能かと。ご主人様の技量を持つてすればの事です」

パートナーから信頼の言葉を受けた鏡矢はインテリジェント・デバイスに向けて笑みを浮かべる。

取引時刻十一時まで、あと一時間三十分。

麻薬密売の三人組

第三鉄鋼工場跡地。

数年前に機能が停止された工場内は埃っぽい事この上ない。昼だというのに工場内に光は指しておらず辺りは薄暗い。

そんな工場内の最深部に、とある三人の人物が立っていた。麻薬密売を仕事としている能力者三人組である。

それぞれとても麻薬密売人とは思えないような格好だった。しかし、彼らの纏う雰囲気からは常人とは異なるものを感じる。

「田島、辺りの様子はどうだ？」

スーツを着崩している男、川寺かわでら帯斗が、周囲探知をその身に宿す能力者、田島十寺に話しかける。

「問題ない。まあ、取引先もまだこっちは到着してないみたいだけどな」

「はあ、さつさと終わらせてどっかで飲もうぜ。こんな埃っぽい所に長いしたくねえよ」

アロハシャツに金髪という装いの人物、紅和臣くれないかずおみは気だるげな声を上げる。

「そういうな。取引時刻まであと十数分ある。それに、金さえ手に入れられれば問題あるまい。この取引で、一気に百万単位の金が入るのだからな」

「ちえ、分かってるよ」

川寺に諭され、紅はポケットに手をつ込みながら、地面に置か

れているトランクへと目を向ける。

この中に入っている麻薬が数百万の金になると考えた瞬間、紅はにやりと笑みを浮かべた。

「俺らの準備は万全だ。田島の周囲探知があれば警察に突き止められようが対処などいくらでも出来る。それに、俺と紅がいれば戦闘になったとしても遅れなど取るまい」

川寺と紅は、自分達の能力に自信を持っていた。

レベルB、中級能力者に位置づけされるだけの能力をこの二人は保有しているからである。

「まあ、その通りだな。もし万が一戦闘になったら、ちゃんと俺を守ってくれよ」

「もちろん分かっている」

「自分の身は自分で守ってくれた方が助かるだけだなあ」

田島がこの二人に信頼の言葉を掛けるのは、二人の能力を知っているからこそだった。

川寺が身に宿す能力は火炎地獄^{ファイヤーワークス}。辺りに火を顕現させ、自在に操る能力だ。

過去に火災事件を起こした事があるが、本人はそれに罪悪感を覚えたりはしていない。

もう一人の人物、紅が保有する能力は電光石火^{ボルト・エッジ}。自らの体の速度を高める身体能力向上系の能力である。

そんな二人と組んでからこれまで、一度たりとも麻薬密売を失敗した事はない。この先も、ずっと失敗などしないだろうとも思える。

田島はにやりと笑みを浮かべる。

それは、これから膨大な金が入るといふ歓喜の気持ちと、自分達を阻める存在なんていないだろうという想いからくる高揚感の

表れだった。

「お、敷地内に反応を発見した。予定時刻ぴったりだ」

「一応聞くが、そいつら以外の反応は？」

「いや、どこにもない。取引は無事に成立するだろうぜ」

念入りに尋ねてきた川寺を安心させるために、田島は明るい声で返答する。

「俺はここを出たら冷たいビールが飲みたいね。ついでに女が傍にいてくれれば最高だ」

「お前は酒と女の事ばかりだなあ、紅。他に欲しいものとかないのかよ」

「今に始まった事でもあるまい」

「おいおい、二人してひでえ言いようじゃん。お前らだつてパアッと自分の欲しい物とかに金使うだろうが。田島、お前なんてこの間でバイク何台目だよ」

「確か十二ぐらいだな」

「ふむ、田島も人の事は言えないようだな」

「そういえば、川寺って全然金使わないよな。なんで？」

「俺は金は使うのではなく、貯める事に意義を感じるのだ。通帳に数千万という文字が並んでいると心が安らぐ」

「えゝ、信じられねえゝ」

これからの金の使い方について、三人は楽しげに話し合う。

「そろそろ買い手がここに到着するぞ。二人とも、気を引き締めてくれ」

「分かった」

「あいよー」

各々が声を返し、視線の先にある扉へと注意を向ける。

カツ、カツと、扉の向こう側の廊下から足音が響いてくる。指定された工場最深部へと迷いなく向かってくるその足音を聞いて、彼らは扉の向こうにいる人物が買い手で間違いないだろうと考え、三人で頷きあう。

そして、足音は扉の前でぴたりと止まった。両開きの扉が、ゆっくりと開かれていくのを三人は確認した。

麻薬密売の三人組？

扉を開けて入ってきた人物は、黒装束を身に纏っていた。

サングラス越しに見るその相貌は十代のように思える。手に握られている黒いトランクには約束の数百万もの金が詰め込まれている事だろう。

しかし、一つ妙な点があった。買い手側の人物は、トランクを手に持っている彼以外には一人もいないのである。

「お前以外には誰も来ていないのか？」

川寺が怪訝そうに訪ねると、若い男は首を縦に頷かせる。

「はい。万が一にも何かあった場合の事を考え、今は工場の外で待機してもらっています」

「そんな必要はないだろう。俺らが能力者であるということ、その内の一人が探知能力を持っている事は事前に説明済みなのだから」

田島の周囲探知があれば、五十メートル以内に侵入してきた人物の存在を探知する事が出来る。わざわざ買い手側でそのような配慮をする必要は全くない。

若い男は申し訳なさそうに頭を下げ、サングラス越しに愛想笑いを浮かべる。

「すみません。何分、常にもこちらを張っているものでして」

「ふん、まあいい。それより、約束の金はちゃんと用意してあるんだろうな？」

「はい。こちらのトランクの中に用意してあります」

ひょいと黒いトランクを持ち上げ、若い男はがちゃりと施錠を外して中身を公開する。

そこには、万札がぎっしりと詰まっていた。

「五百万円です。どうぞお納めください」

「よし、では早速トレードだ。そちらのトランクを渡してもらおう」

川寺がトランクへと手を伸ばすと、若い男はすっと手を後ろに引いた。

「そちらのトランクと同時に交換させていただきませんか？」

金だけを受け取り、麻薬を渡されない事を警戒しているのだろう。川寺は小さく息を吐く。

「随分と警戒しているのだな？ 俺達が金だけを持って逃走すると？」

「そんな事はありません。ただ、可能性はしっかり消しておきたいだけです」

「へー、若い割にはしっかりしてるじゃん。いや、若いからこそ警戒してんのか？」

「仕事柄、というやつです」

会話に割り込んできた紅に、若い男は簡単に答える。

川寺は床に置かれていたトランクを手に取り、若い男の前に立つ。

「これで文句はないだろう」

「はい。ありがとうございます」

にこりとサングラス越しに笑みを浮かべ、その若い男は引いてい

た手を前に出した。

五百万もの金が目のある。川寺、および一步後ろにいる田島、紅は歡喜の表情を隠そうともしない。

川寺の手がトランクに届きかける。笑みが顔一杯に広がった瞬間、視界がぐにやりと歪んだ。

「!？」

地面に背中を強く叩きつけられ、肺から空気が吐き出された。咽て上手く呼吸が出来ない状況で、川寺は自分が若い男に投げられたのだと理解する。

いきなりの出来事に呆然としている二人に、その若い男は拳を叩き込んだ。

「ぐおおっ!？」

「うおっ、危ねえ!」

田島はなす術もなく腹部への攻撃を受けて気を失った。紅はその身に宿す能力、電光石火にて若い男の奇襲に反応し、バックステップにて回避する。

その隙に、若い男は麻薬の入っているトランクを手にとった。

「て、てめえ! 一体何しやる!」

額に青筋を立てて、紅は襲撃者に問うた。呼吸を整えている川寺も襲撃者へと目を向ける。

片手に二つのトランクを持ち、余ったもう片方の手でサングラスを地面に放り捨て、男の素顔が明らかとなる。

「SCGの高天原鏡矢だ。お前達、麻薬密売人の能力者三名を確保

する」

トランクを持ったまま鏡矢は駆ける。開いていた紅との距離が一瞬にして縮められた。

「ざけんなよ！ この若造が！」

紅は鏡矢によって放たれる拳を、いとも簡単に受け止める。

パパン！ と更に連続で放たれた拳を受ける音が工場内に響き渡る。

電光石火によって体の速度が上がっている紅にとって、この程度の攻撃を防ぎきるのは片手で十分だった。

余った片方の手が高速で放たれる。鏡矢はトランクを使ってそれを防ぎ、下から顔面へと向けて蹴りを繰り出した。

「ちいっ！」

体を仰け反らせ、紙一重で蹴りを交わす。

（電光石火の動きについてきてやがる！？ こいつも俺と同じ身体能力向上系か！？）

距離を取る為に後方へ飛び、紅は鏡矢の後ろに視線を向ける。

「小僧、よくもやってくれたな。俺の火炎地獄を持って、その身に苦しみを刻み込んでやろう」

呼吸が整い立ち上がった川寺は何もなかった空間から炎を顕現させる。それが火球を形作り、鏡矢へと高速で放たれた。

麻薬密売の三人組？

迫る火球を、鏡矢は小刻みなステップで交わしきる。

火球が地面を捉えると、ゴウ！ という凄まじい音を工場内に響かせた。

「はっ！ 二対一なら俺らが負けるわけがねえ！」

紅は踏み出した一步にて鏡矢の眼前へと現れる。にやりと笑みを浮かべ、紅は叫ぶ声を上げた。

「いくぜ！ 二乗加速！」
ダブルアクセラレーション

繰り出された紅の拳は、先程のものよりも段違いに速かった。常人の二倍速く動けるようになった紅は本来の人間なら一発しか放てない攻撃を、違う場所に二発放つ。

防ぎきれぬわけがない。今まで戦ってきた能力者が誰も二乗加速についてこれなかった事を紅は知っている。ゆえに、その表情からは勝ちを確信したかの様な余裕が見て取れた。

しかし、その表情はすぐに歪められる事になる。

追いつけるはずのない二乗加速に、鏡矢は見事に反応した。

倍の速さで動いているはずの紅の攻撃がことごとく受け流されていく。攻撃を繰り出す内に、紅の表情に焦燥の色が浮かぶ。

（な、なんでだよ！？　なんでこいつ、俺の二乗加速についてこれるんだよ！？）

「紅。そこをどけ！」

紅が肉弾戦闘を仕掛けている間に、川寺は大量の炎を顕現させていた。

川寺の言葉を聞き、紅は攻撃に巻き込まれぬよう遙か後方へと下がる。

そして次の瞬間、顕現された炎が束となって鏡矢へと襲い掛かる。周囲を囲むようなその炎の渦に、鏡矢が巻き込まれる姿を川寺は確認した。襲撃者を倒したという安堵が張り詰められていた緊張の糸を一瞬緩んだ。

その一瞬が命取りになるとも知らずに。

「！？ 川寺！ 後ろだあああああ！」

紅の声を聞いた時にはもう遅かった。

鏡矢に足を払われ、咄嗟に手を出す事も出来ずに川寺は地面に頭をぶつけた。その衝撃で脳が強く揺さぶられ、川寺の意識を途切れさせる。

「ちくしょうがあああああああ！」

残り一人となった紅は獣の様に吼えながら鏡矢の元へと迫る。がむしゃらに倍の速度で腕や足を振るい、麻薬密売を台なしにした襲撃者へと喰らいつく。

しかし、鏡矢は至って冷静だった。倍の速度で放たれているはずの攻撃を無駄なく受け流し、怒れる紅を真正面から見据える。

（どうして、どうして俺の攻撃が通用しない！？ こいつも二乗加速を？ だが、それならここまでの余裕はないはずだ！ だってこいつは、俺よりも速く動いている！？）

川寺の能力によって残った炎を背景に近接戦闘が続く。

攻める紅。流す鏡矢。傍から見れば紅優位に見える戦いだ、それはあくまで表面上の様子に過ぎなかった。

倍の速度での移動は、ただ速度を高めるよりも体への負荷が大きい。脳から体の各部位へと流れる微弱な電気信号を平常時の倍で伝達しているこの状態は、そう長くは続かない。

「ぐ、があ!？」

突如紅の脳がずきりと痛んだ。電光石火を酷使して発動した二乗加速による反動だ。

反動によって生じた痛みにより、脳から体の部位へと伝達されていた電気信号が瞬間的に停止する。

一秒間程度の体の硬直。その隙を見逃すまいと、鏡矢は右拳が放たれるた。

「はっ!」

短く息を吐き、打ち上げるように繰り出されたアッパーカット。それは的確に紅の顎を捉えた。

呻き声さえ上げられず、僅かに宙へと浮いた紅は背中から地面へと落下する。倒れた紅は立ち上がろうと腕に力を入れたが、数秒後には力尽きたように仰向けになって倒れこんだ。

戦闘開始から、わずか二分程度での決着。

鏡矢は服についた埃を払い、二の腕に装着されているインテリジエント・デバイス、セーラへと話しかける。

「これで、一件落着かな」

「素晴らしいお手並みでした。ご主人様」

隅に置いておいた二つのトランクの元へと移動し、中身を確認する。物的証拠は十分に揃っていた。

「麻薬密売人三名の身柄を確保できるように、SCGに人の派遣を要請するメールを出してくれるか？」

「かしこまりました」

セーラがメールを送っている間に、鏡矢は倒れている三人へと視線を移した。強めに衝撃を加えたから、目覚めるのに少し時間が掛かるだろう。

SCGの人間が来るまで、鏡矢は辺りに散っている炎の残り火を見つめていた。

「まさか、買い手に成り済まして堂々とターゲットと接触するとは。君は頭もよく切れるようですね。高天原鏡矢君」

第三鉄鋼工場へとやってきたSCGのメンバーの中には、なぜか準指令官である来栖が混じっていた。本来、準指令官は現場に出てくるような立場の人間ではない。それを不思議そうに鏡矢が問うた所、「君の活躍をすぐにでも祝したかったのですよ」との事だった。

「これは俺の相棒の提案だったんです。ですから、俺はあくまでそれを実行したに過ぎません」

「おや、そうでしたか。君自身だけでなく、パートナーもとても優秀だ」

「お褒めの言葉、感謝いたします」

画面を点滅させて答えたセーラに、にこりと来栖は微笑みかける。

「今日はもうお疲れでしょう。後は私達が処理しますので、もう帰って結構ですよ」

「はい。では、失礼します」

「ああ、その前に、もう一つ連絡しておく事がありました」

敬礼して踵を返そうとしていた鏡矢は動きを止めた。

「あなた、いや、セーラさんを含めれば二人ですね。SCG内ではあなた方二人の功績が高く評価されています。もしかしたら、近い内に行われる昇進試験へ呼びが掛かるかもしれないので、覚えておいてください」

SCGのメンバーにはランクのようなものが設定されている。

入ったばかりのメンバー、および最下級に属されるランクは鴉^{からす}。

次に中級を意味する燕^{つばめ}。そして上級に位置づけされる鷹^{たか}。総司令官にのみ与えられる通称は鳳凰^{ほうおう}という。

ランクを上げるには昇進試験を受けて合格しなければならないのだが、試験を受けるにはある程度の実績を残してからでないとならないのである。しかし、鏡矢は短期間でそのある程度の実績を残している。

「君には鴉だなんて称号は似合いませんからね」

「……分かりました。それでは、失礼します」

鏡矢は身を翻し、第三鉄鋼工場を去っていく。

そんな彼の背中を、来栖は姿が見えなくなるまで見つめていた。鏡矢へと向けている興味が、眼鏡越しの瞳に如実に現れていた。

土曜日の二日前

麻薬密売を阻止する任務を終えて鏡矢が彩華学園の入り口に戻ってきたのは、夕方の午後四時過ぎだった。

「はあ、今日の任務も大変だったな」

「お疲れ様です。ご主人様」

インテリジェント・デバイスであり、パートナーでもあるセーラから労わりの言葉を貰い、鏡矢は微笑を浮かべる。

任務にはあまり時間が掛からなかったが、内容はとてもハードだったように思える。

探知能力者の探知を回避し、その後にレベルBの能力者二名との戦闘。これで疲れないわけがない。

主に紅との近接戦闘が原因だ。紅の能力、電光石火による二乗加速に対応するのは、通常の人間なら不可能な事だろう。

が、紅は動きが速かっただけで技術があったわけではない。所々動きに無駄があったため、動きについていくのは事態は容易だった。しかしそれも、鏡矢の異様なまでの身体能力あってこそその話だが。入り口をくぐり、鏡矢は彩華学園の敷地内へと足を踏み入れる。

授業が終わった頃だからか、敷地内にはまばらに生徒達の姿が見受けられる。楽しそうに談笑している男子生徒達。ベンチに腰掛け、幸せそうに寄り添うカップル。

と、そんな生徒達の中に、鏡矢は見覚えのある人物の姿を見つけた。

相手も鏡矢に気づいたようで、たたたたたたとセミロングの髪を揺らしながらこちらに駆け寄ってくる。

「カッガミン！ おかえりなさい！ 奏ちゃん、カガミンがいなくてすごい寂しかったよ！」

鏡矢の事をカガミンと呼ぶ生徒は、この学校に一人しかいない。

「ああ、ただいま瓜生さん」

駆け寄ってきてくれた瓜生に、鏡矢は笑みを浮かべて返答する。
その返答に、なぜか瓜生は首を傾げた。

「あれ？ なんだかお疲れ気味だね？」

「……もしかして、顔に疲れが出てる？」

「うん。なんだか気だるそうな感じ。でも、そんなアンニュイな雰囲気のカガミンもイケてるね！」

「うーん、嬉しいような、そうでもないような」

瓜生へ言葉を返しながら、鏡矢は周りに視線を向けた。何人かの男子生徒がこちらを遠目に眺めている。その中には、鏡矢のクラスメイトの視線も含まれていた。

向けられる視線には嫉妬のような感情が込められていて、ひしひしとそれが伝わってくる。ただ、その嫉妬は鏡矢がSCGのメンバーとして特別視されているからなのか、それとも鏡矢が瓜生と話しているからなのかは定かではない。

彼らの視線をなるべく意識しない事にして、鏡矢は瓜生へと視線を戻した。

「あ、そうだ。カガミン、明後日の土曜日って空いてたりする？」

「え、なんで？」

「二人で一緒にどこかに出かけたいたって思ったの。奏ちゃんはカガミンともっと仲良くなりたいのです！」

屈託のない笑みを浮かべながら外出の誘いをしてくれた事を嬉しく思いながらも、鏡矢は申し訳なさそうな表情を浮かべて返答する。

「ごめん。土曜日には用事が入ってるんだよ」

「そつか、それは残念。……！ も、もしかして、奏ちゃんよりも先にお誘いを掛けた女の子がいて、その人と出かける予定があるとかそういうオチ！？」

鏡矢が土曜日に会う約束をしている人物、神崎綾は確かに女の子だから瓜生の言っている事は当たっていた。

別に隠すような事でもないと思い、鏡矢はそれを肯定するように頷いた。

「まあ、合っていると言えば合っているかな」

「奏ちゃんの予想的中！？ く、くそう、この奏ちゃんが先を越されるなんて何たる不覚！ というか、彼女はいないと言っておきながら、彼女候補はしっかりいるんだね！？」

「あ、あの、瓜生さん？ 誤解しているみたいだけど、俺とその子は別にそんな関係じゃ」

「このままじゃ、カガミンが他の女の子とフラグを立てちゃう！ 奏ルートに誘導するために、近日中に対策を打たなくては！」

よく意味の分からない事を言いながら、瓜生は女子寮の方へと走っていった。

その後姿を眺めながら、鏡矢は独り言のように呟いた。

「……元気だなあ、瓜生さんは」

「そうですね。ああいう方が慕ってくださるのですから、ご主人様は幸せ者です」

「ああ、こうして気さくに話しかけてくれるのは嬉しいな。親しくなれて良かったと思っている」

『したい』という言葉のニュアンスが、鏡矢とセーラの間では食い違っていた。

それを悟ったセーラは何も言わず、主の鈍さに対して苦笑するように画面を何度か点滅させる。

鏡矢の方はそれに気づいておらず、止めていた歩みを再開させた。

「そういえば、神崎さんと待ち合わせしている場所は西ノ宮だったっけ？」

先程のやり取りの事を思い出し、鏡矢はセーラに土曜の待ち合わせ場所を問うた。

「はい。西ノ宮駅に朝十時です。東原駅から五つの駅なので、到着には三十分程度かと」

「分かった。西ノ宮には九時半には着いておきたいから、電車の時間を後で調べておいてくれるか？」

「かしこまりました。ご主人様」

相手を待たせないように計らう主の気持ちを汲み取り、早速セーラは電車の時刻を調べ始める。

一方の鏡矢は二日後を楽しみにしながら、視界に入ってきた学生寮へと進んでいった。

能力者達の休日

土曜日を迎えた鏡矢は、待ち合わせ場所である西ノ宮へと向かっていった。

電車に揺られながら過ぎていく窓の外の景色を眺め、鏡矢は小さく溜息をつく。

「なんだか緊張するな。瓜生さんにデートとか言われたからか？」

「ご主人様は女性との交際経験がおりではありませんから、緊張してもおかしくないかと」

まるで独り言の様に呟かれた言葉だったが、鏡矢の二の腕付近に装着されているインテリジェント・デバイスが丁寧な返答する。

「……なんだか少し馬鹿にされたような感じがする」

「いえ。そんなつもりは全くありません。ただ、ご主人様がなぜ緊張するのかを考えた結果でございます」

傍から見れば一人で話しているように見えるにも関わらず、電車に乗っている人達は鏡矢の事を見もしない。それはただ単純に、インテリジェント・デバイスの普及によるものである。

インテリジェント・デバイスは世界的に普及している携帯端末だ。人工知能を搭載している上に、インターネットに接続可能、容量も従来の携帯端末と比べ物にならずに増えている。

よってたくさんの人々がインテリジェント・デバイスを使用するようになった。鏡矢の周りにこそ使っているものはいないが（便利さゆえに多少値が張るため）、この電車内にも何人かインテリジェント・デバイスを使っている人物の姿が見受けられる。

西ノ宮のホームへと電車が到着すると、扉が滑るように開かれた。

人の流れに乗るようにして、鏡矢は電車から降りる。

ホームには大勢の人が降りてきた。ここ西ノ宮はレジャー施設や巨大なショッピングモールを有する都市で、休日になると学生やカップル、家族連れで大変賑わうのである。

近くにあった階段を上がって改札口を目指す。大きな駅ではあるが、改札口を探すのにそう時間は掛からなかった。

交通機関無料パスで改札をくぐる。待ち合わせ場所の改札口前は見渡して、鏡矢は会う約束をしている人物を見つけた。

白のワンピースに足の細さを強調するかのようなニーソックス、そして長く伸びた黒い髪。

「おい、神崎さん」

オブジェのような物が立っている場所に神崎はいた。鏡矢の声に顔をあげ、ぱあっと花が開いたかのような笑みを浮かべる。

「ごめん。早く来たつもりだったんだけど、待たせちゃったみたいだね」

時刻は九時二十分。待ち合わせの時刻よりもは四十分も早い。しかし、待たせてしまった事には変わりがないで鏡矢は申し訳ない気持ちになった。

「いえ、私もさっき来たばかりですから気にしないでください」

神崎は待たされた事を気にはしていないようだ。むしろ上機嫌な様子で、声も先週初めて会った時に比べれば弾んでいる。

「女の子を待たせてしまったんだ。せめて奢らせてくれないかな？ それにここで立ち話もなんだし、どこか近くにあるお店にでも入

ろっよ」

オブジェはどうやら待ち合わせ場所の目印として使われているらしく、多くの人がオブジェ付近に集まっている。その中から神崎をすんなり発見できたのは、彼女が一際輝いて見えたからだ。

鏡矢の提案に神崎は頷いた。

「そうですね。それでは行きましょうか！」

横に並んで二人一緒に歩く。その姿は傍からすれば若いカップルのようだった。

そんな二人の後ろ姿を眺め、悔しそうな声を上げる人物が約一名。

「くううううう！ あれが例の彼女候補か！ すっごい可愛いじゃん！ 奏ちゃん大ピンチだよおおお！」

「……なあ、何で俺までお前のストーキングに付き合わされる事になっただ？」

瓜生に向かって疑問をぶつけたのは村雨樹だ。黒のジーンズに水色のシャツという夏に合う清潔感のある服装である。

対して瓜生はフリルのスカートを着用している。端正な顔立ちと相まって、通り過ぎる際に幾人もの人物が瓜生へと視線を向けていた。

「理由なんて単純だよ。カガミンのお嫁さん候補がどんな子か確か

めるために決まってるじゃん！」

「だから、それになんで俺が同行させられてるかって聞いてんだよ！　しかも何だよお嫁さんって」

「イツキはカガミンの親友でしょ？　親友がどんな女の子とデートしてるか気にならないの！？　それに昨日まではノリノリだったじゃん！」

「そ、それはそうだけどよお」

「はい、じゃあ異存なしって事で！　カガミン追跡作戦開始！」

「人の話を聞けえ！」

鏡矢、神崎ペアの消えた方へと走り出す瓜生。ツッコミながらも、村雨は瓜生を追いかけた。

能力者達の休日？

巨大な駅の中を数分歩いて外に出た鏡矢と神崎は、すぐ近くにあった喫茶店へと足を踏み入れた。

店員に案内され、二人座りの席へと案内される。横の窓から覗く景色からは駅からは巨大なショッピングモールが見えた。

鏡矢はカフェオレを、神崎はオレンジジュースを注文し、届けられた飲み物をストローで啜った。

「これからどこに行くかは決まったりしてる？」

ストローから口を離れた鏡矢は神崎に行く先を尋ねる。

「鏡矢さんがよろしければ、一緒に西ノ宮グリーンパークに行きたいんですけど」

「グリーンパークか。話に聞いた事はあるけど、まだ一度も言った事がないな」

西ノ宮グリーンパークはこの近隣で最も巨大なレジャー施設だ。絶叫マシンが多い事でも有名だが、注目すべきは敷地内の自然。敷地の半分は自然公園になっていて、カップルの憩いの場になっている。

絶叫マシンが有名としか知らない鏡矢は、神崎に微笑みかける。

「神崎さんは絶叫マシンが好きなんだね。俺もあの手の乗り物は好きだよ」

「じゃあ、一緒に行ってくれますか！」

「もちろん」

頷きながら大きめのコップに入れられたカフェオレをかき混ぜる。カランと氷同士がぶつかり、涼しげな音を響かせた。

「あ、ありがとうございます！ まさか了承してもらえとは思ってなかったので嬉しいです！」

「神崎さんの中の俺は、結構いじわるだったりするのかな？」

苦笑を浮かべながら言う鏡矢に、神崎はいえいえと首を振る。

「私の中の鏡矢さんはとても優しく、頼りになる素敵な人です。いや、これは私の中だけの話ではなく、周りの人物から見てもそうじゃないかと思いますよ？」

「ほ、本人の目の前で言える君はすごいね」

神崎と視線が合わないように窓の外へと視線を向け、鏡矢は右手で頬を掻く。その仕草を、神崎はしばし見つめていた。

「ああ、順番がおかしくなっちゃったけど、どうして神崎さんは俺を誘ってくれたんだ？ グリーンパークになら、同じ学校の友達とでも行けば良かったのに」

「あ、え、ええと、それはですね……」

さっきまで快活な調子だった神崎の言葉が急に淀んだ。持っていたオレンジジュースのコップをテーブルに置き、視線を下へと俯かせる。

「……もしかして、能力絡みで友達と何か問題があったりした？」

「いえ！ 友達とは仲良くやっています！ それもこれも鏡矢さんのおかげです！」

「う、うん、それならいいんだけど」

勢いに押され、鏡矢はそれ以上の追求を放棄する事にした。もし彼女に悩みがあったのだとしても、無理に聞き出すのは良くない事だと判断したからである。

だが実際の所、鏡矢の考えは的を外していたのだが。

しばしの沈黙。お互いに言葉もなく飲み物を啜っている、神崎がゆっくりと視線を鏡矢へと向ける。その瞳は潤んでいて、熱つばさの感じられるものだった。

「……たかったからです」

「ん？ 今なんて？」

囁かれた言葉を聞き取れず、鏡矢は首を傾る。

神崎はワンピースの裾をきゅっと握り、恥ずかしそうに視線をわずかに下へと向けた。

「鏡矢さんと、一緒に行きたかったからです」

言われた言葉の意味が分からず、鏡矢は数秒間その言葉を頭の中で反芻する。

それがさつき神崎へと聞いた質問の返答だと気付くのに、その時間には掛からなかった。

「イツキ。あれどう見てもカップルに見えるよね？ 見えちゃったりするよね！？」

「瓜生。お前はもう少し落ち着け」

鏡矢、神崎の座席の近くに、村雨と瓜生は座っていた。気付かないよう身を低くしているその姿は、傍を通りかかった店員の首を傾げさせる。

「関係ない話だけだよ。よくもまあ知り合って一目目の男と一緒に同行させてストーキングを決行しようという気になったよな」

「カガミンの友達は私の友達なの！ それに、友情に日数なんて関係ない！」

「良い事言ってるように思えてくるけど、その結果がストーキングじゃ笑えないわ！」

瓜生と村雨が知り合ったのは、つい昨日の事だった。

何度か村雨と鏡矢が仲良くしているのを見ていた瓜生は、偶然廊下に居合わせた村雨に話掛け、友好関係を築いたのである。

（まさか知り合ってすぐこんな事に付き合わされるとは思わなかったぜ）

小さく溜息をつき、村雨は鏡矢達へと目を向ける。

「で、お前はストーキングなんかしてどうする気だよ？ ただ見てるだけじゃ、結局何の意味もないんじゃないかねえ？」

「ふふん、心配ご無用だよ。いざとなったら二人の前に飛び出して昼ドラのような現場を構築するから！」

「解決策になってねえ！」

ノリでストーキングを引き受けてしまった（一緒に出かけようと言われて頷いた結果、瓜生に騙された）昨日の自分を恨みながら、村雨はもう一度溜息をついた。

能力者達の休日？

喫茶店を後にして西ノ宮グリーンパークへと向かった鏡矢達の間には、会話らしい会話というものがなくなっていた。

話す事がないわけではない。ただ、お互い気恥ずかしさに言葉が出てこないのである。

（お、俺は一体何を意識しているんだ。神崎さんはただ単に、友人として俺と一緒にいきたいと言ってくれているだけなのに）

先程までいた喫茶店にて神崎に言われた言葉が脳内にてリプレイする。その度頬が熱くなり、なんだか気持ちが悪く落ちつかない。

もしかしたら自分に恋心を抱いてくれているのでは？ と一瞬でも考えてしまうのだから困ったものだ。と鏡矢は思う。今まで女の子に告白されたり、付き合ったりした事のないこんな自分に、そのような感情を抱いているわけがない。

雑念を払うように首を小さく振り、鏡矢は何も考えずにただ歩く事にした。

神崎へと視線を向けると、彼女も頬が紅潮していた。わずかに俯いているその横顔がとても美しく見える。

無言のまましばらく歩くと、目の前に西ノ宮グリーンパークの入り口が見えてきた。入り口へと向かっているのは鏡矢達だけでなく、老若男女の大勢の人々が鏡矢達の周りを歩いている。

「すごい人の数だね。乗り物に乗るにしても、これだと時間が掛かるかもしれないな」

「そ、そうですね」

神崎が自分の言葉に返答してくれた事にほっとしながら、鏡矢は

神前へと手を指し伸ばした。

神崎はその指し伸ばされた手を見て、鏡矢へと視線を向ける。

「きよ、鏡矢さん？　これは？」

「手を繋ごう。はぐれたりすると、合流するのが大変だからね」

恥ずかしくはあるが、合流するのに時間を掛けると乗り物に乗る時間が減ってしまう。ここに来るのを楽しみにしていた神崎の事を考えての行動だった。

しばし鏡矢の手を見つめて、神崎は手を伸ばそうとしては止め、手を伸ばそうとしては止めを繰り返す。

そして、神崎はゆっくりと鏡矢の手を取った。

「じゃあ行こうか。乗りたい乗り物があつたら言つてね」

「は、はい！」

先程までの沈黙が消え、鏡矢は安堵の笑みを浮かべる。はぐれないうつ手をしっかりとお互いに握り、鏡矢達はグリーンパークの入り口へと歩みを進めた。

「うええええん！　ついには手を繋ぎ始めたよ！？　このままじゃ奏ちゃんルートにカガミンを誘導出来なくなっちゃうよおおお！」
「……言ってる事がよく分からないぞお前。そして落ち着け」

人目をはばからず大声を上げる瓜生に、村雨は呆れて嘆息する。

「これが落ち着いていられますか！　好きな人を他の女の子に取られるんだよ！？　この泥棒猫！」

「俺が泥棒猫みたいになってるんだけど。つうか、こんだけ人が多いんだからほぐれないために手を繋いだんじゃねえの？　もしカッブルとして出来上がってて手を繋いだんなら、駅の辺りから普通に繋いでるだろ」

「むむ、そう言われれば確かにそうかも。イツキって意外に頭は回る方なんだね！」

「意外ってなんだよ意外って」

「いやあ、てつきりただのバトルバカだと思ってたからさ」

「少しは言葉をオブラートに包め！」

まるで漫才のようだと思ツコミながら村雨は思う。それがなんだか少しだけ楽しいとも感じている。

鏡矢達の方へと視線を向けると、どうやら行き先は西ノ宮グリーンパークらしい。入り口には巨大な緑色のアーチが設置されていて、入場者達は皆そのアーチの下を潜っていく。

「で、俺らもグリーンパークに向かうのか？」

「もちろん！　ここまで来たら二人の監視を最後まで続けるよ！」

まあ、イツキにはこれ以上強制はしないけどね」

一見人を振り回してそんな瓜生ではあるが、相手の事はちゃんと考えている。

神崎が男子に人気な理由を上げさせれば以上の三つが上げられる。明るい、人懐っこい、そして優しい。

村雨は瓜生のそんな一面を垣間見た気がした。

（まあ、帰ってもやる事もないし、別にいいか）

我ながら人が良いと思いながら、村雨は瓜生へと視線を向けた。

「最後まで付き合ってやるよ。俺も少し気になるし」

「おお！ イツキのノリの良さに奏ちゃんは感動したよ！ よおし、引き続き力ガミン追跡作戦を実行する！」

「お、おい！ いきなり走りだすなよな！」

駆け出した瓜生に文句を言いつつ、村雨はその後を追う。しかし、彼の表情はどこか楽しげに見えた。

暗躍する者

午後十二時を迎えた西ノ宮グリーンパークには大勢の人々が押し寄せていた。

カップル、家族連れ、友人同士でここを訪れている誰もが楽しそう、または幸せそうな顔でグリーンパーク内を闊歩している。

だが、その中で一人だけ例外的な存在がいた。

グリーンパーク内に設けられたベンチ。そこにその男は腰掛けている。

虚ろな瞳に感情がないかのような表情。夏だというのにローブを身に纏うその男は、誰からどう見ても異質だった。

しかし、誰もそんな彼の事を見ようとしない。いや、まるで彼の存在に気付いていないかのようなだった。

ふいに、男のローブのポケットが振動した。男はローブのポケットから携帯端末を取り出し、それを耳に当てる。

『あーもしもし？ こっちはスタンバイばっちりだけど、青谷くんの方は準備出来てる？』

青谷と呼ばれたその人物は、何の感慨もなさそうに首を頷かせる。

「ああ、問題ない。いつでも作戦を実行に移せる状態だ」

『そーかいそーかい。いやー青谷クンの能力は便利だね。周りの人間に自分の存在を認識させない能力。言ってしまうと透明人間のようなもんだ。俺らの仕事には打ってつけの能力だよなあ』

「ステルス化と一緒にしてもらいたくはないな。俺の有する認識^{サイコ・キャンセリング}不可はステルス化のようなチャチな能力などではない」

姿を透明にする能力は存在するが、青谷の能力、認識不可は姿を

消す能力よりも優れている。

目の前に青谷がいても、相手はその存在を認識できない。例えば相手が探知能力者であったとしても、それを相手は認識できない。何者にも青谷を認識する事は出来ない。彼が身に宿す能力は、ある種最強の能力だと言える。

青谷の電話先の人物はカラカラと笑い、青谷の言葉を肯定した。

『だよねえ。青谷くんだけは敵に回したくないなあ。つくづく味方で良かったと思ってるよ』

「……敵に回したくないのはお互い様だ。遠野」

電話先の人物、遠野は楽しげに笑う。

『まあ、俺の能力もなかなか危険ではあるからねえ。青谷くんの存在が認識できなかつたのが問題なく殺せるだろうし』

「……………」

『うそうそ。冗談だよー。そんな事をマジで言ったら青谷くんに寝首取られちまう』

「ふん」

どうしてもよさそうに青谷は電話から自分の傍に置いてある鞆へと意識を向ける。

その鞆には爆弾が仕込まれていた。とはいっても、このベンチが壊れる程度の範囲の威力しかないのだが。

『じゃあ無駄に駄弁るのもそろそろ止めにして、作戦の確認をパパッで行っちゃおうぜ』

「爆弾による小規模な爆発によって、グリーンパーク内の人間を外へと非難させる。その状況下で放送室からターゲットの名前を呼び、特定の場所へと呼び寄せ、襲撃する」

『ありやりや、全部青谷クンが言っちゃったか。ま、手間が省けたから構わないけどね』

「いや、俺からお前に確認していない事がある。遠野、お前は放送室を無事に占拠出来たのか？」

青谷の問いに、遠野は電話越しにニヤリと笑みを浮かべた。

『当たり前だろー？ 放送室にいた奴全員縄で縛りつけて、ロッカ
ーの中に押し込んでやったよ』

「間違っても殺したりは？」

『してないって。依頼された事は徹底して守ってるつつの。まあ、
ム力ついたりしたら殺っちまったりするかもしれないけど』

「……………」

『はいはいいつもの冗談ですよー。少しはパートナーを信用しろつ
て。全く、青谷クンは心配性だなあ』

ピツと電話の通信を切り、青谷は左腕につけている腕時計へと視線を向けた。

時間は十二時十分を指している。作戦決行時刻まで、あと十五分
だった。

青谷はターゲットとなっている人物の名前を静かに呟く。

「高天原鏡矢」

この間知ったその名前の人物には何の恨みもない。だが、裏を返
せば何の感情も青谷は抱いていなかった。

とある人物に任務を依頼された。だからそれを遂行し、報酬を得
る。

青谷は時計から視線を外し、空を見上げた。晴れ晴れしい青空は、
やはり青谷に何の感慨も抱かせなかった。

幕開け

西ノ宮グリーンパークに入ってから少し時間が経った。近くにあった時計塔へと視線を向けると、針は十二時を指していた。

「ここは遊園地のエリアと違って静かだね」

「はい。空気もおいしいし、なんだか穏やかな気持ちになれます」

グリーンパークの代名詞とも言われているジェットコースター。そして外の景色を一望出来る巨大な観覧車の二つに乗った鏡矢達はグリーンパーク内の自然公園へと足を運んでいた。

様々な乗り物が置かれていたエリアに比べると自然公園のエリアは人が少ない。喧騒とは程遠いその場所は、とても穏やかで過ごしやすい空間だった。

夏の日差しは木々によって遮られ、時にそよそよと流れてくる風が心地いい。

「いい所だね。グリーンパークは絶叫マシンが有名だと聞いていたから、こんな風に落ち着いた場所なんてないと思ってたよ」

「鏡矢さんは自然公園の事をご存知じゃなかったんですか？」

「ああ、グリーンパークに足を運ぼうと思った事がなかったから」

「……お気に召さなかったですか？」

しゅんと顔を俯かせた神崎に、鏡矢は慌てて首を振る。

「いや、そういう意味で言ったわけじゃないよ。一緒に行くような相手がいなかったし、一人でこういう所に来るのもどうかと思っていたからさ。でも、神崎さんがそのきっかけを作ってくれたわけだ。感謝こそすれ、不満を口にするような事は何もないよ」

「そ、そうですか。それなら良かったです」

ほっとしたように胸を撫で下ろす神崎。鏡矢はそんな様子を見て微笑を浮かべた。

二人の間にあつた妙な緊張感は時間が緩めてくれた。最初の方こそ神崎を意識し過ぎていた鏡矢だったが、今では自然と会話する事が出来ている。

「そろそろどこかで休憩しようか。歩き回ってばかりだったし」
「あそこなんてどうですか？」

神崎が指さした場所は巨木の下だった。地面には黄緑色のふわふわとした芝生の生えている。

神崎の提案に頷いて、鏡矢達は巨木の下へと歩みを進めた。

「ここで少し待ってて。何か飲み物を買ってくるよ」
「あ、それなら私が」

それ以上神崎の言葉を聞かず、鏡矢は近くの自動販売機へと駆け出した。

インテリジェント・デバイスを自動販売機にかざすと自動販売機のボタンが点滅し始める。小銭を入れなくても、携帯端末に支払い機能が付いているためだ。

鏡矢は最初にお茶のペットボトル。次に五百ミリ缶のオレンジジュースのボタンを押した。

順番に音を立てて飲み物が落ちてくる。鏡矢はその二つを手にとつて神崎の下へと向かった。

「お茶とオレンジジュース、どっちがいい？」
「じゃあ、オレンジジュースで」

買ってきたオレンジジュースを神崎に渡し、鏡矢はキャップを開けてお茶を喉に流し込む。乾いていた喉が潤う爽快感を味わって、小さく息をついた。

巨木へと背を預け、周りに視線を移す。自然公園内にはまばらに人の姿が見受けられた。

「あの、鏡矢さん。今日は一緒にグリーンパークに来てくださって、ありがとうございました！」

神崎へと視線を向け、鏡矢は首を傾げる。

「どうしたんだ急に？ お礼を言われるような事ではないと思うけど」

「い、いえ。SCGの任務などで忙しい筈なのに、こうして私のわがままに付き合わせてしまって……」

鏡矢は神崎の言葉に首を横に振り、やがて苦笑を浮かべた。

「俺は好きでSCGに入ったわけではないし、忙しいからこそこういう息抜きは必要だと思っている。だから、これが例えば神崎さんのわがままだったとしても、俺はとても助かっているんだよ」

「……………」

「まだまだ時間はあるし、せっかく来たんだから遠慮なんてしないで楽しもうよ。俺に気を遣う必要なんてないからさ」

「……はい」

申し訳なさそうだった神崎の表情が、次第に笑みへと変わっていく。鏡矢はそれに安堵して、ペットボトルに口をつけた。

（さて、午後はどのアトラクションを巡ろうか）

だが、鏡矢が午後どのように活動するかを思案しようとした瞬間、事件は起きた。

近くにあつた無人のベンチが、音を立てて爆発した。

それは同時に、鏡矢を標的としている人間達の行動開始を意味していた。

決意

距離が離れていたため、鏡矢と神崎に被害はなかった。だが、今の状況はとも落ち着いていられるような状態ではない。

遠くの方から不規則に爆発音が聞こえてくる。やがて青空へ向かって、いくつもの黒煙が舞い上がった。

「い、一体なんで爆発が!？」

「分からない。ただ、無闇に動いたりはしない方がいい」

驚きを隠せない神崎に、あくまで鏡矢は落ち着いて応答する。自然公園内からもいくつか煙が上がっていた。公園内にいた人々が、悲鳴や叫び声を上げながら走り去っていく。

緊急事態で混乱しているのだろ。本能的にこの場は危険だと察知して、入り口へと向かっているに違いない。

（これは間違いない。誰かの手によって引き起こされた事だ。じゃあ、一体そいつは何の為にこんな事を？）

数秒間思索して、鏡矢はインテリジェント・デバイスであるセーラに向かって口を開いた。

「セーラ。この騒ぎを実行した人物の意図は何だと思う？」

「現状ではあまり情報がないですが、少なくとも殺戮が目的ではないと思います。もし大量の人間を殺すのなら、この程度の威力しか持たない爆弾を仕掛ける意味がありません。なので、この爆発はあくまでグリーンパーク内の人々を混乱させるためだけに使用したのではないかと予想します」

実際、セーラの言っている事は正しい。殺しを目的としているのなら、あまり威力を持たない爆弾をあちこちにセットするより、大型の爆弾を広場辺りにセットする方が確実だ。

人を殺すのが目的でないのなら、自然と人々を混乱させる事が目的という事になる。では、なぜ人々を混乱させる必要があるのか。

その答えは、思いもよらぬ形で知らされる事になる。

爆発したベンチ付近にある一本の鉄の棒。その頂点に取り付けられたスピーカーから、突如音が発せられた。

『あー、あー、ただいまマイクのテスト中。ってんな事する必要なのか。えーと、西ノ宮グリーンパーク内にいる高天原鏡矢クン。この放送を聞いているのなら今から十五分以内にグリーンパークの中央広場に来てくれ。大事な事だからもう一回言うよ。今から十五分以内にグリーンパークの中央広場に来るように。もし十五分以内に来なかった場合は、残念だけど他の来場者に死んでもらうしかない。残されている大型爆弾で入り口付近を爆破する事になるね。いやー、俺も出来ればそんな事はしたくない。高天原鏡矢という人間が、寛大な心を持っている事を祈るしかないね。じゃあ、来るようならまた十五分後にー』

それは、この爆発を引き起こした人物の声に違いなかった。

さっきまで分からなかった犯人の行動理由。それが、今の放送によって明確になった。

馬鹿らしいその理由に、心の底から怒りがこみ上げてくる。

「……俺を誘い出すためだけに、こんな事をしたっていいのか」

幸せそうだった人達の笑顔を壊し、一瞬にして笑い声は悲鳴に変えられた。楽しい思い出は、恐怖という形にすり替えられた。

鏡矢という、ただ一人の人物をおびき出すために。

表情こそ落ち着いていたが、鏡矢は拳を硬く握った。もう少し強く握れば、手のひらから血が滲みそうな程に。

「き、鏡矢さん……」

心配そうに神崎が鏡矢を見上げる。手を握る力を弱め、鏡矢は神崎に目を向けた。

「神崎さん。ここはとても危険だ。今すぐに入り口へと向かってくれ」

爆発を引き起こした人物の目的はあくまで鏡矢だ。関係のない神前を巻き込むわけにはいかない。

「……鏡矢さんは、どうするんですか？」

「俺は中央広場に行く。犯人の目的は俺だ。俺が行けば、とりあえず他の人達にこれ以上の被害はない」

特定の場所へと移動させられるという事は、これが罠である可能性が高い。

だがそれでも、行かないわけにはいかない。自分が理由となって大量の人が死ぬのは、あまりにも辛いから。

「さあ、神崎さんも早く逃げて」

隣にいる神崎に逃走を促す。が、神崎は首を横に振った。

「私も、鏡矢さんと一緒に広場に行きます」

「……本気で言っているのか？ 自分の身に危険が及ぶかも知れないんだぞ。それに、もしそうだった時に、俺が君を守ってあげられ

るような保障は全くない。そう考えると、君はむしろ足手纏いにしかならない」

言い方がきつくなってしまうたと、鏡矢は少し反省する。だが、これから行く場所はとても危険だ。神崎の身を案じているからこそ、危険な場所にわざわざついてきてほしくないからこそその言葉だった。それでも、神崎は鏡矢から視線を逸らそうとはしなかった。

「……私の軌道迷走は、とっても危険な能力です。事故を誘発させて、街中を混乱に貶める事だって可能な能力です。でも、鏡矢さんは言ってくれました。私の軌道迷走は、人を守る事の出来る力だって。それなら、私はあなたを守りたい。私を能力と向き合わせてくれたあなたを、私はこの手で守りたいんです」

鏡矢は神崎の瞳を覗き込む。その瞳には微塵の揺らぎもありはしなかった。

できれば、神崎を危険な場所に連れて行きたくない。グリーンパークの外に非難してもらい、安全圏にいてほしい。

そんな思いを込めて、数秒間神崎を見つめた。ひよっとしたら考えを改めてくれるかもしれないと期待して。

しかし、彼女の意味は一切揺らぎを見せなかった。

溜息混じりに、鏡矢は渋々首を縦に振る。

「分かった。でも、これだけは約束してほしい。絶対に無茶はしないでね。俺を守ってくれるのは嬉しいけど、その結果神崎さんに何かあったら意味ないから」

「はい。約束します」

鏡矢の目をしっかりと見据え、神崎は力強く頷いた。

残り時間は十三分。目的地へと向かって、鏡矢と神崎は駆け出し

た。

悪意、そして友情

同時刻。西ノ宮グリーンパーク内の至る所から爆発が起きた。小規模な威力であり、なおかつその爆発場所付近に人がいなかったのは不幸中の幸いだろう。死亡者は一人も出ていない。

しかし、突如の爆発で人々は混乱した。悲鳴を上げて逃げ惑う人々は他の客の事も考えずに押し合って前へ進もうとする。

うまく前に進めず、怒鳴り声をあげる人物も出始めた。その近くにいた女性が大事そうに抱えている赤ん坊が泣き声を上げる。

先程までは誰もが楽しそうであり、幸せそうな笑みを浮かべていたというのに、一瞬にして人々の表情は恐怖や不安で引き攣ったものへと変わっていた。

そんな天国から地獄に変わったような景色を、放送室の窓から眺める人物が一人。

「いやー、盛り上がってるねえ。どいつもこいつも必死で逃げ惑ってやがる」

ニイツと醜惡な笑みを浮かべ、遠野蓮とのおのれんは放送室にある機材のスイッチをONにした。

「さーて、こつちも言われた事をさっさと済ませるか」

窓際からマイクのある場所へと移動して、遠野はマイクに口を近づける。

『あー、あー、ただいまマイクのテスト中。ってんな事する必要ないのか。えーと、西ノ宮グリーンパーク内にいる高天原鏡矢くん。この放送を聞いているのなら今から十五分以内にグリーンパークの

中央広場に来てくれ。大事な事だからもう一回言つよ。今から十五分以内にグリーンパークの中央広場に来るように。もし十五分以内に来なかった場合は、残念だけど他の来場者に死んでもらうしかない。残されている大型爆弾で入り口付近を爆破する事になるね。いやー、俺も出来ればそんな事はしたくない。高天原鏡矢という人間が、寛大な心を持つている事を祈るしかないね。じゃあ、来るようならまた十五分後にー」

気楽そうに放たれた言葉は口調とは反対に恐ろしい事実を告げていた。

放送が終わった瞬間、人々の悲鳴が更に大きくなる。自分の身を安全な所へ向かわせるために、人々は一斉にどこかへと走りだす。

機材のOFFにして、遠野は放送室を後にしようとした。が、ロッカーから聞こえてくるドンドンドン！ という音の方へと視線を向ける。

「これ以上は手出ししないから安心しな！。その内助けがくるだろうし、そこでしばらくゆっくりしててくれ」

数個あるロッカーの中には、放送室の従業員が閉じ込められていた。体を縄で縛られ、ガムテープで口を塞がれて声を出す事が出来ずにいる。

だからこそ、さつきから出せという意思表示の為にロッカーの扉を内部から蹴りつけている。それゆえに遠野の声はその音に相殺され、ロッカーの中に閉じ込められた従業員達には聞こえていない。

遠野はロッカーから視線を外し、放送室を後にした。先程と同じ様に、醜惡な笑みを浮かべながら。

爆弾の爆発を確認して、青谷涼は止めていた歩みを進め始めた。
グリーンパークのあちこちから上がる黒煙。それは雲一つなかった青空に黒いシミを作り出す。

空から下へと視線を移せば、悲鳴を上げて逃げ惑う人々の姿が目に入る。誰よりも早くこの場を離れようとして他の人とぶつかり、怒鳴り合う彼らの姿を見て、

（なんと哀れな姿だ）

青谷はそう内心で思う。

青谷はそんな人々の中を通っていく。誰一人として、入り口の反対へと向かっていく青谷を見ようとしなかった。

目指す場所は中央広場。そこでパートナーの遠野と落ち合い、二人で高天原鏡矢を仕留めるという算段になっている。

（遠野が高天原鏡矢を引き付けている間に俺が認識不可で奴へ近づき、仕留める）

頭の中で作戦内容を反芻しながら、青谷はロープの内ポケットに忍ばせているナイフを取り出す。刃こぼれていない事を確認して、すぐにナイフを元の場所に戻した。

殺す事に躊躇などない。ただ、依頼された内容を淡々とこなす。最悪の足音が、静かに目的地へと近づいていく。

鏡矢と神崎をつけていたあの二人も、グリーンパーク内の爆発に気付き、驚愕していた。

近くにあったベンチが爆ぜ、空へ向かっていくつか黒煙が舞い上がっている。自然公園内にいた人々が、恐怖に顔を強張らせて走っていく。

「い、一体どうなったんだ!? 瓜生、高天原と女の子は無事か!?」

「うん、とりあえず大丈夫そうだよ! カガミン達の場所の近くが爆発した形跡はない」

数十メートル離れた場所にいる鏡矢達が無事と分かって、村雨はほっと胸を撫で下ろした。が、ここが危険な場所である以上、その安堵も長くは続かなかった。

爆破されたベンチ付近にあるスピーカーから、気楽そうな口調の声が放たれたのだ。一瞬思考が停止して、徐々にスピーカーから放たれた言葉が情報として頭の中で整理されていく。

言葉の断片に、鏡矢の名前が含まれていたこと。彼が今から十五分以内に中央広場に行かないと、大勢の人が死ぬことになるということ。

「イツキ! カガミン達が走り出した!」

思考が終わるのと、瓜生が叫ぶのはほぼ同時だった。

瓜生が指差す方向へ視線を向けると、鏡矢と神崎がどこかへ向かって駆け出している。

おそらく、中央広場に向かおうとしているのだろう。行かなければ、大勢の人が死ぬことになるから。だが、場所を指定するという事は爆弾を仕掛けた人物にとって都合の良い何か、つまり罠があるという事だ。

こんな事、おそらく誰が考えても分かる。SCGのメンバーである鏡矢なら尚更だ。

にも関わらず、鏡矢は中央広場へと向かおうとしている。

「くそっ、このまま放っておけるかよ！」

親友が敵の罠に飛び込んでいくのを見て、自分だけ逃げようだなんて考えは村雨にはなかった。

鏡矢達の後を追うように、村雨はその場から駆け出した、遅れて瓜生も走り始める。

四つの意思が、一つの場所へ向けて集結しようとしていた。

遭遇

自然公園を抜け、鏡矢達は遊園地エリアへと足を踏み入れる。
時折見かける爆破されたベンチや銅像は、その形をわずかながらに残していた。

人々の姿はない。既に大方の来場者はグリーンパークの外に出て行ったのだろう。犯人の目的はあくまで鏡矢で、爆破は脅しに過ぎないのだから、入り口を無闇に爆破するような真似はしない筈だ。
神崎と共に並走しながら、鏡矢は犯人の意図を考える。

（犯人の目的は俺だ。爆破の理由は分かった。だが、犯人が俺を狙う理由は一体なんだ？）

恨まれるような覚えは……残念ながらある。彩華学園入学後、すぐにSCGへと引き抜かれ、そのSCG内でもベテランの能力者を差し置いて難易度の高い任務をこなしている鏡矢を、恨んだり妬んだりするような輩はいくらでもいる。

しかし、たったそれだけの理由でこんな大事件を引き起こすだろうか？ それこそ、鏡矢が一人の時に襲撃でもしたらいい。面を合わせなくて良い分、中央広場への誘導に比べたら成功率も高い。

それに、いくつもの爆弾を仕掛けるのも一人では出来ない事だ。空に舞い上がる黒煙の数はざっと二十以上。これだけの数を気付かずに設置するのは難しい。

そこから導きだされる結論は、

（複数の人物による作戦といった所か。スピーカーの人物が俺を誘き出し、引き付けている間に他の人物達がどこから襲撃を仕掛けてくるかもしれない。俺を狙う理由は……まあ、犯人から直接聞けばいいだろう）

相手の行動を予測する事は状況からある程度可能だ。だが、犯行動機などというものはそれこそ無限に存在する。

先程も上げた通り鏡矢が気に食わず行動を起こしたとか、たまにたま肩がぶつかってイラつと来たからだとか、場合によって空が青いからなどと理由で事件を起こしたりする者もいたりする。憶測で考えた所でそれは結局答えなどではない。なら、それを知っている本人に聞いた方が早いのだ。

レンガ造りの建物の下に空いている通路を走りながら、鏡矢はセーラに話しかける。

「この通路を抜けたらどこに進めばいい？」

「右の道へ向かってください。しばらく進むと橋が見えてきます。そこを通り、真っ直ぐ進めば中央広場です」

インテリジェント・デバイスである彼女は、グリーンパーク内部を画面に表示させ、的確に主へと中央広場までのルートを伝える。インテリジェント・デバイスをあまり見たことのない神崎はセーラの対応に思わず「すごい」と呟いた。

「お褒めいただけて光栄です」

「あ、いえっ」

独り言のつもりで呟いた言葉に丁寧に対応され、神崎は一瞬驚きの表情を見せた。

そんな一人と一機のやり取りを横目に見て、鏡矢はふつと微笑を浮かべた。

通路を抜けると視界に多くのアトラクションが飛び込んでくる。午前中に乗ったジェットコースターや観覧車も見受けられた。

そんな数々のアトラクションの横を通り過ぎ、鏡矢達はセーラの

言っていた橋を目指す。

内部が前面ガラス張りになっている『ミラーラビンス』というアトラクションの建物を通り過ぎた先に、その橋はあった。

十数メートルの橋だった。こげ茶、薄茶、茶色。三色のレンガで造られている橋は、こんな非常時でさえなければ来場者をどこか異国に来たかのような気分させてくれていた事だろう。

「あの橋の先に中央広場があります」

「分かった。道案内ありがとう、セーラ」

パートナーに礼を言い、鏡矢と神崎はレンガ造りの橋に足を踏み込ませる。

しかし、半分ほどまで行った所で橋に異変が起きた。

レンガの橋が、音を立てて崩壊し始めたのだ。

下に流れている川へと向かって、レンガが次々に落ちていく。

鏡矢達の足元が、今にも崩れそうになっていた。

驚きから、神崎は一瞬動きを止めてしまう。

「きゃあ!？」

「神崎さん!」

バランスを崩しそうになった神崎を受け止め、鏡矢はそのまま神崎をお姫様抱っこした。

「しっかり掴まっててくれ!」

神崎に指示するや否や、鏡矢は人間離れした身体能力を発揮した。崩れ落ちていく橋。その中でかろうじて足場として機能する場所を瞬間的に判断し、その足場へと跳びながら移動していく。

鏡矢の踏みつけたレンガは重みで川へと落ちる。それを数回繰り返す。

返し、鏡矢達は無事に反対側へと辿りついた。

首に腕を巻きつけて掴まっていた神崎は、慌てて腕を鏡矢から話した。

なぜか頬を朱に染めながら、神崎は申し訳なさそうに頭を下げる。

「ご、ごめんなさい。早速足手纏いになってしまいました……」

「気にしないで。それより、怪我とかはない？」

「はい。鏡矢さんのおかげでなんともないです」

神崎の返答に安堵しながら、鏡矢はゆっくりと神崎を地面に下ろす。

表情を引き締め、鏡矢は先にある道へと視線を向けた。

「神崎さん、さっきも言ったけどここから先は危険な場所だ。君の軌道迷走は強力だけど、くれぐれも無茶はしないでね」

「……分かりました」

鏡矢の言葉にしっかりと頷き、神崎も先の道へと視線を向ける。

止めていた足を再び動かし始め、二人は広場へと向かった。

広場の中央には巨大な噴水があった。水が宙へと上がり、下に張られている水面へと落ちて涼しげな音を立てている。

普段なら多くの人がこの場にいただろう。一緒にきた人物 恋人や友人、はたまた家族 と笑い合い、幸せそうな空間を作り出していたに違いない。

しかし、今この場に来場者達の姿はなかった。

ただ一人だけ、噴水前で笑っている人物を鏡矢は視界に捉える。

その笑みは、幸せだとか楽しいだとかそういった明るい類のものではなく、ただただ狂氣的で醜悪な笑みだった。

遠野蓮

「やあやあ。約束通り来てくれて嬉しいよ高天原鏡矢。他の人を巻き込ませまいとする君の善意には感服させられる。俺なら他の奴に構わずここから逃げ出してやるだろうねえ」

その男は全体的に線の細い人物だった。チノパンにＴシャツとラフな格好で、黒い髪はツンツンに逆立てられている。

描写だけなら一般人と大差なさそうだが、一つだけ一般人と明らかに違うものがある。

噴水前に立つその男が身に纏う雰囲気は、酷く冷たいものだった。

「しかし、まさか彼女連れでここに来るとは思わなかったなあ。普通外に逃がすと思うんだけどねえ。まあ、人の価値観はそれぞれだし、俺もその子がいた所で別に構わないけどね」

その男は鏡矢から神崎へと視線を移し、ニイッと笑みを浮かべた。途端、神崎は背筋に氷を当てられたかのような寒気を覚えた。鏡矢も、その男を警戒するように睨みつける。

「そんなに警戒しないでくれよ。俺はただ、高天原鏡矢と話がしたいだけなんだからさ」

「お前の目的は一体なんだ？ 話じゃなくて、俺を殺す事が目的なんじゃないのか？」

突き刺すような視線を向けたまま、鏡矢はその男に話しかける。

「あれま、俺の目的はバレバレってわけか。そうだよ、俺の目的は君を殺す事さ。ああ、別に恨みがあるわけじゃないから、そこら辺

は心配しなくてもいい」

「じゃあ、なぜ俺の事を狙う？」

「頼まれたからって理由だよ。ある人物から依頼を受けてね。おつと、これから殺そうという人物に何を語ってるんだか俺は」

はつきりと殺すと言われ、鏡矢は臨戦態勢に入る。身勝手な目の前の人物に対して沸きあがってくる怒りを面に出さないよう努めながら、鏡矢は一步前へと踏み出した。

「お前、名前はなんて言う？」

鏡矢を殺す事を依頼されたのなら、依頼人の情報を辿られないように名乗らないのが当たり前だ。一応駄目元で名前を聞いてみると目の前の男は何の感慨もなさそうに自分の名を名乗った。

「ん、ああ。俺は遠野蓮。君を殺すために雇われた人間だよ」

「……雇われたのに堂々と名前を名乗っても構わないのか？」

セオリーを無視した相手の行動に戸惑いながら指摘する。遠野は逆にぱかんとした表情をして首を傾げた。

「殺すんだから名乗ったって問題ないんじゃない？ あ、そうか、今回は想定外な事に彼女連れでここに来られたから、女の子の方を逃がしたら名前が出回っちゃうのかー。でも、女の子の方を殺すのは依頼の管轄外だしなー。まあいいや。依頼主も言う事を聞いてくれればいいって言ってたし、細かい事は気にしなくて」

考えるのが面倒になったようで、遠野は頭をボリボリと掻いて思考を中断した。

「ただまあ、やっぱりその女の子は逃がしてあげた方が個人的にはいいと思うけどねえ。だって、彼氏が目の前で殺される様を目に焼き付ける事になるんだからさ。人を殺す事にはもう何の感慨も抱かねえけど、これから生きていく人にトラウマを植え付けるってのはちよつとねえ」

不思議な価値観を持った人物だな、と鏡矢は思った。人を殺す事は躊躇しないのに、ターゲットではない人物に心の傷を負わせるのは気が引けるだなんて。

しかし、今の口ぶりからすると遠野は神崎に手を掛ける気がないらしい。一瞬安堵した鏡矢だが、すぐに気持ちを引き締め直す。

「その心配はない。俺はお前に殺されてやる気は全くないからな」

「強気だねえ。それは君が、レベルSの能力者だからかな？」

「!？」

思わぬ情報の提示に、鏡矢は驚きを露にした。

「そんなに驚く事か？ 学校の教員とか、SCGの奴らはみんなその事を知っているんだろ？」

依頼主は大分鏡矢の事を調べていたらしい。まさか、自分がSCGのメンバーである事も知られているなんて。

「……お前は、俺がレベルSだと知っていながら戦いを挑むのか？」
「依頼なんだし当然だろ。それに、君は全然能力を使っていないんだろ？ それとも、身体能力の上昇がレベルSの能力の正体なのかねえ。それにしても地味な気がするけど」

うーんと唸りながら、遠野は数秒間感慨に耽る。

遠野のその動作の中には一切油断は含まれていない。無闇に動くのは危険だと思い、鏡矢は隣の位置にいた神崎を自分の後ろへと下がらせる。

「ま、いいや」と顔を上げた遠野は、すっと手のひらを前にかざした。

「考えたって仕方ないや。もう殺しちまおう」

瞬間、鏡矢の目の前に半透明な『何か』が現れた。それは腹部へと向かって真っ直ぐに伸びていく。

「
!？」

反応の遅れた鏡矢へと、その『何か』は襲い掛かった。

パラディン・エア

ギリギリ体を反らし、鏡矢は半透明な『何か』を避けた。

「へえ、いい反応速度だ。けど、誰も一発とは言っていないんだよね」

真下から現れた『何か』が、鏡矢の首を目掛けて飛んでいく。

避けきれないと踏んだ鏡矢は咄嗟に腕を盾にして、『何か』を受け止めた。

「っ!？」

盾にした腕の肌に突き刺さる感触。痛みで顔をしかめたが、鏡矢はすぐさまその場から数歩後ろに下がった。

鏡矢の腕から赤い液体が零れ落ちる。鮮やかな朱が、地面を赤い斑点を描く。

「き、鏡矢さん!？」

駆け寄ろうとしてきた神崎を傷ついていない方の腕で制し、鏡矢は遠野を睨みつけた。

「一体どんな能力を使っているんだって顔をしてるね。いや、この場合はどうも同じ事を考えるか」

楽しげに笑いながら、遠野は言葉を続ける。

「高天原鏡矢。君はレベルAの能力とレベルBの能力、これは一体どんな風に区別されているか知っているか？」

唐突な質問に、鏡矢は答えようとしないう。いや、最初から応じようという気はなかった。

遠野はつまらなさそうに溜息をつく。そして、勝手に話を再開し始めた。

「これは俺の依頼主が言っただけで、能力がレベルで区別されているって事は、能力自体に差が存在するからなんだそうだがまあ確かに、炎を自在に操れる能力と物を少し動かす能力じゃスペックに差があるもんねえ。で、その依頼者曰く、レベルAの能力とレベルBの能力が一番基準としては明確なんだとさ」

鏡矢は遠野の隙を伺いながら、その話に耳を傾ける。神崎も遠野の話に聞き入っていた。

「その基準っていうのは、拳銃よりもその能力が強いかどうか。これも言われて納得したなあ。いくら強力な能力者でも、銃弾を喰らったらただじゃすまない。それに、能力を発動するよりも、銃の引き金を引く方が早いからね。だが、レベルAに部類される能力者は違う。レベルAは、その銃を克服した能力者に授けられる称号なんだよ」

「……………」

SCGのメンバーである鏡矢は、その事を既に知っていた。ただ、自分からその事実を口にするのが嫌だった。

世界の国の中には能力者を軍事兵器として扱っている国が存在する。他国との戦争の際にレベルAの能力者を戦場へ向かわせ、戦果を上げるために。

日本や近隣の国々では能力者を兵器としては使用しないという条約が立てられているため、今の所問題は起こっていない。が、事実

として能力者が兵器扱いされている事を否定する事は出来ない。

人工的に能力者を作り出すというプロジェクトがある。万が一それが成功し、他国に戦争目的として流用されるような事になったらと思うとゾツとする。

「前ふりが長くなった。要するに俺が言いたいのは、レベルAは銃よりも優れているって事なんだよねえ。じゃあ、君のレベルSは一体どうなるんだろうね？ 身体能力の向上は、レベルAにさえなるのが厳しいだろうに」

「……何が言いたい？」

「君は力を隠してるんだろって事さ。まあ、使わないなら使わないで、殺しやすいから助かるんだけどね。ちなみに」

遠野が手をかざした瞬間、あちこちから『何か』が出現した。

「ディン・エア 俺はレベルAの能力者なんだよね。大気を刃に変える空バラ剣想像っていう、チートみたいな能力を身に宿した」

鏡矢に向かって大気で生成された刃が襲い掛かる。真正面からだけでなく、死角からも向かってくる刃。それを鏡矢は、的確に全て回避した。

「マジかよ。話には聞いてたけどとんだ強者だな。じゃあ、不本意だけどセコイ手を使わせてもらっよ」

遠野の視線が、神崎へと向けられた事に鏡矢は気づく。それと神崎の目の前に刃が生成されるのはほぼ同時だった。

「神崎さん！」

鏡矢の叫び声に、遠野はにいつと醜悪な笑みを浮かべた。神崎をかばって怪我を負ってくれたなら成功だ。庇わなかったとしても、生成した刃は急所へは向かわせていないから死にはしないだろう。そう遠野は考えていた。

しかし、鏡矢の叫びは神崎への危惧だけを知らせているわけではなかった。

生成された大気の刃が神崎へと迫る。その刃は陶器の様な白い肌を傷つけ、見るにも痛い傷跡を　残す事はなかった。

寸前で軌道をずらされた刃は見当違いな方へと飛んでいく。神崎の身には傷一つ付いていなかった。

もし神崎が普通の女の子なら、鏡矢は迷わず間に飛び込んでいただろう。そうしなかったのは、振り向いた時に神崎が首を振って、自分への助けを請わなかった事ともう一つ。

彼女が、遠野と同じレベルAの能力者であり、物体の軌道を逸らす能力、軌道迷走を身に宿していたからだった。

活路への思考

「……まさか、連れの女の子も能力者なんていうオチ？ 俺の空剣想像を防いだ辺り、その子もレベルAの能力者ってところか」

不快感を与える笑みを浮かべていた遠野は、舌打ちと共に顔を歪ませた。自分の考えた通りに物事が進展しない事に苛立ちを覚える。鏡矢は神崎へと目を向ける。軌道迷走のおかげで体には傷一つ付いていない。安堵の笑みを神崎へ向けると、それに応じるように微笑んでくれた。

表情を引き締め、鏡矢は遠野へと視線を戻す。

「ターゲットは俺のはずだ。関係のない神崎さんには手を出すな」

神崎には軌道迷走がある。物体の軌道をずらす事の出来るあの能力なら、神崎に傷が付く事はないだろう。しかし、それでも自分以外へ刃を向けた目の前の男に対して怒りがこみ上げてくる。

表情には出さないようにして、鏡矢は遠野を見据えた。

「関係ないっていうのは間違いじゃないかな？ 彼女は既に俺の名前を知っているわけだし、この事柄に大きく関わっていると思うんだよね。それに、結果的には傷ついていないわけだし、彼女が何らかの方法で俺の空剣想像を防げると分かった時点でもう攻撃する気はない。ただまあ、これで遠慮なく能力を行使できるってわけだ。高天原鏡矢、それはつまり君の死亡率をただ上げたに過ぎないんだぜ？」

遠野が腕を天へとかざす。その動作によって出現するのは、半透明な空気の刃。

それは鏡矢や神崎の上空に埋め尽くされるほど形勢されていた。

「降り注げ！」

瞬間、形成された数多の刃が落下を開始する。

接近する刃。神崎はそれを、軌道迷走で左右へと軌道をずらした。空気の刃は次々にコンクリートへと突き刺さり、地面を傷つけていく。

こんなものを人が喰らえばただじゃすまないだろう。皮膚を切り裂き、溢れ出した朱によって作られる血溜まりの中へと沈む鏡矢の姿を想像して、遠野は口元を吊り上げた。

が、既に刀の雨の中に鏡矢の姿はなかった。

「!？」

真横へと移動してきた鏡矢の存在に気付き、遠野は驚愕の表情を露にする。

わずかに出来た隙。それを見逃さずに、鏡矢は遠野の顔面へと拳を放とうとした。

しかし、寸前の所でピタリと拳が止められる。遠野の顔面と鏡矢の拳をはさむ形で、半透明な刃が現れたからだ。

「あんまり舐めるなよ。俺が空剣を作るのに要する時間は0・15秒だ。作るのに一秒も二秒もかかってたら、拳銃を克服したただなんて言えないだろ？」

その言葉と共に、新たに空気の剣が鏡矢を囲うように出現した。その剣が動き出す直前に、鏡矢は人の動きを超越した身体能力で跳躍し、その場から離脱する。

次々と形成され、襲い掛かってくる刃。それを巧みに回避しながら

ら鏡矢は考える。

（場所を限定せず、ほぼ無限に形成できる空気の刃。対してこちらは常に回避運動を行わなければならない。長期戦になれば不利になってしまうのは明白だ）

攻撃さえ加えられれば決着はすぐに着くだろう。しかし、瞬間的に形成される刃によって遠野は守られている。

（もしかしたら、『アレ』を使う事になるかもしれない……）

自分の身に宿る能力の事を考え、鏡矢は首を横に振った。安易に攻略を諦め、能力に手を出すにはまだ早い。

「さあて、君はいつまで攻撃を避け続けられるかな？」

空気の剣がコンクリートを抉り、煙を立てる中、鏡矢は機会を待つ。

鏡矢達の後を追って走っていた瓜生と村雨は、とある場所にて動かしていた足を止める。

中央広場へと繋がる橋。それが下の川へと崩れ落ちていた。

「マジかよ！ この先に中央広場があるってのに、わざわざ回り道して行かなきゃいけねえってのか！」

時間が惜しいというのに、それに追い討ちをかけるかのようなこの状況。どうにかして渡れないものかと周りを見てみるが、向こう岸に行けるのはこの近くでは崩れてしまった橋のみのようだ。

「仕方ないと割り切るしかないね。イツキ、ここで動かないよりは、他の橋を探した方がいいんじゃないかな？」

「……くそっ、運がわるい」

舌打ち混じりにぼやきながら、村雨と瓜生は別の橋を探そうと走り始めた。

その姿を視界に捉えたある者が、後ろからついて来る事に気付かず。

絶対絶命

（まさか、まだ逃げていない人間が遊園地内にいるとはな）

中央広場へと向かっている最中、二人組の男女の姿を発見する。
壊れていた橋を一瞥して、彼らは別の場所へと走っていく。

（……あの放送を聞いて中央広場へと向かっているという事は、彼らは高天原鏡矢と関係のある人物という事か）

遠野蓮によって行われた放送。中央広場へ鏡矢がやってこない場合、人の固まる遊園地の入り口を爆発するという大胆な脅迫だった。だが、あくまで遠野と青谷の目的は鏡矢一人。大量殺戮は依頼者の望んでいる結果ではない。

ゆえに、先程の放送にあったグリーンパーク入り口の爆破というのは嘘である。それでも、先に小型の爆弾で人々を混乱させていた事から、ターゲットへの脅迫が見抜かれづらくなっている。

そして、中央広場へと繋がるレンガ造りの橋に仕掛けられていたトラップ。トラップが発動している事から、鏡矢があの場所を通った事が分かった。

（正直、遠野の空剣想像だけでも恐ろしい殺傷力がある。もしかしたら、既に高天原鏡矢は殺されているかもしれない）

遠野とペアを組んでいる青谷は、彼の能力の恐ろしさを知っている。例えば自分の認識不可を使ったとしても、広範囲に発動できる空剣想像をデタラメに使われたら堪ったものではない。

しかし、依頼者の話によれば高天原鏡矢は拳銃を克服したとされるレベルAより上に位置づけされるレベルSらしい。レベルAまで

しかランクがないと思っていた青谷は、その時にレベルSとなる能力の規準を聞いた。

『レベルAは拳銃と同等、もしくはそれ以上の力を有しているわけですが、レベルSは正直、その比じゃありません。レベルSは、単体でレベルAの能力者五十人程度を相手取る事が出来ると言われています。今までに発見された例は、高天原鏡矢を含んだとしても両手の指より少ないでしょう』

依頼者の言葉は、今でもはっきりと思い出せる。高天原鏡矢を殺すように依頼してきた人物とは思えないような言葉だった。

『まあ、彼はどうやらその力を普段は使わないようにしているみたいですから、あなたの認識不可で不意をついてしまえば何の関係もありませんがね』

ついでのように付け足されたその言葉によって、遠野と青谷はこの作戦を計画した。本日の高天原の予定や行き先といった情報は依頼者が全て提供してくれたため、作戦の実行は難しくはなかった。（強いて言うなら、行き先等の情報は本日知らされたため、小型爆弾を仕掛けるのに時間が掛かった事ぐらいか）

（……心配するべきはターゲットではなく、遠野の方というわけか）
そう考えながら、青谷は前に行く二人の後をついて行く。

「俺は人を一方的に殺したりするのも好きだけど、実際の所、こういう風にお互いの身を削りあう戦いつても大好きなんだよね。君はどうだい、高天原鏡矢？」

遠野の言葉に返答せず、ただ鏡矢は空剣想像によって作られる空気の刃を交わし続ける。

何度か接近して打撃を叩き込もうとしたが、直前で形成された刃がその打撃を阻む。人間の反応速度の限界に限りなく近い0.15秒という時間で形成される刃よりも早く、遠野へ攻撃する事は出来そうになかった。

（形成より早く攻撃できないのなら、形成された剣を壊して攻撃するしかない）

今までの戦いの中で至った方法が通用するかどうかを試す為に、鏡矢は形成され、こちらに向かってきた半透明な刃へと足を出した。鋭く放たれた蹴りが半透明な刃を砕く。剣の硬度はガラスより硬めといったところか。

体勢を整え、鏡矢は常人離れた身体能力で遠野の元へと駆ける。あっという間に距離を詰め、鏡矢は勢いを殺さずに蹴りを繰り出した。

直前で形成された空気の剣。それは鏡矢の蹴りによって粉々に碎け散り、防御の意味を成さなかった。

「くっ！」

予想外の出来事ではあったが、反射的に遠野は左手で鏡矢の蹴りを受け止めた。数メートル後ろへ後退させられ、遠野は左手をだらんと力なく垂らす。

「……まさか、剣を砕いて強引に攻めてくるとは思わなかった。おかげで左手がイカレしまった。格闘家もびっくりに蹴りだったよ」

しかし、遠野はダメージを負った状況で余裕そうな表情をしている。

「まあ、ダメージを追ったのはお互い様だったみたいだけどね」

遠野の言う通り、鏡矢の右足部分のズボンが赤く彩られていた。体重も、左足の方に少し偏っている。

強引に攻め入られた際、遠野は鏡矢の左右から空剣想像にて刃を形成した。遠野の身を守る刃が砕かれた直後、新たに出現した刃が鏡矢の右足を襲ったのである。

「残念だったね。これで、君は身体能力を満足に生かせない」

勝利を確信したように、遠野はにやりと笑みを浮かべた。

友のために

（くそ、迂闊だったか……）

赤く滲んだズボンを見下ろしながら、鏡矢は唇を噛む。足を負傷してしまつては遠野の空剣想像を避ける事ができない。

右足に少しでも体重を傾けると、裂かれる様な凄まじい痛みが走る。それでも相手に痛みの程度を悟られないため、鏡矢は表情を変えないように努める。

「痛いなら痛そうな顔してくれてもいいんだぜ？　どのみち、最後には殺される事になるんだからさあ」

横へ払うように遠野が手を動かすと、宙に半透明な刃が形成される。それは真っ直ぐに鏡矢へと放たれた。

「ぐう！」

普段の鏡矢なら、いとも簡単に空気の刃を回避できていただろう。しかし、足を負傷している今の鏡矢では、真っ直ぐに飛んでくる空気の刃を避ける事すら難しかった。

刃は右肩を軽く挟った。傷口から溢れ出てきた血は、服をじわじわと赤色に染めていく。

「鏡矢さん！？」

「おおっと、いいのかい？　君が高天原鏡矢の傍に移動したら、俺は空剣想像で彼を串刺しにしちゃうけど？」

鏡矢の元へ駆け寄ろうとした神崎へと、醜悪な笑みを浮かべなが

ら遠野が制す。

彼女の能力、軌道迷走はかなり厄介な能力だが、それはあくまで自分とすぐ近くのものにしか作用されない。ある程度距離の離れている鏡矢と神崎を近づけさえしなければ、遠野にとって神崎は問題にならない。あくまで、彼の目的は鏡矢の殺害だ。

右肩を抑えている鏡矢へと視線を移し、遠野は芝居掛かった仕草で右手を広げる。

「チェックメイトだ、高天原鏡矢。身体能力だけでよく戦った方だと思うよ。そんな君に敬意を表して、最後は俺の全力で君を殺そう」

言葉と同時に、鏡矢の四方八方に空気の刃が形成される。そこには、とても避けられるようなスペースは存在しない。

（回避する手段はない。神崎さんとは隔離されている。状況はとても絶望的だ）

痛みや焦りで、鏡矢の頬を汗がゆつくりと伝う。

絶望的な状況下で、肩につけられているインテリジェント・デバイスのセーラが画面を点滅させた。

「ご主人様。この状況を抜け出すには『朱い月』を使うしかありません」

自分の隠している能力を使うことを提示されるが、鏡矢は言葉を返さない。

できれば、あのような力を使いたくない。状況が状況でも、それは揺るがなかった。

「お気持ちは察しています。ですが、ここで死んでしまつては」

「分かっている。けど、俺は自分のためだけに能力を使いたくないんだ」

甘い事を言っているのは鏡矢自身分かっている。だが、長年自分で戒めてきた力をただ生き残るためだけには使えない。

「じゃあ、これでさようならだ。死んでくれ……と、その前に、また君の友達が広場に来ているみたいだね」

遠野が向けた視線を追うように、鏡矢は首を動かした。

セミロングの女の子に、ツンツン頭の男。見覚えのある二人の姿を見て、鏡矢は目を見開いた。

「瓜生さんに、村雨？　なんでこんな所に」

「さっきの放送を聞いてここに来たのか。ふうん、友達思いだね。だけど、今からその友達が殺されるよ。あ、一步でも動いたりしたら、君達を殺すからね」

「やめろ！　あいつらは関係ない！　手を出すな！」

焦る鏡矢の様子を見て、遠野は愉快そうに笑い声を上げる。

「彼らが動いたりしなきゃ手を出したりがしないさ。動いたりしなければね」

瓜生も村雨も遠野へと視線を向ける。その表情は困惑や焦り、怒りなど、様々な感情が入り混じったものだっただけ。

「ふざんけんじゃねえよ！　高天原が何したってんだ！」

「そうだ！　カガミンに手を出すな！」

「そう言われても俺も仕事だからなあ。それに、別に自分が死ぬわ

けじゃないんだし、そこで大人しく友達が死ぬのを見ていなよ」

鏡矢の方へと向き直ろうとする遠野を村雨は睨みつけた。ギリッと齒軋りし、アスファルトを踏みしめてその場から加速する。

「友達が死ぬのを、黙って見ていられるかよ！」

村雨の両腕、両足が淡い光を放つ。剣刀性質で腕、足に剣の性質を付与させて、目の前の敵を討たんと間合いを詰めていく。

遠野はその様子を見て、ただ呆れを露にした。

「はあ、馬鹿だな。これじゃあ君を殺すしかないじゃないか」

半透明な刃が村雨の後ろに出現する。死角からの攻撃の接近に、村雨は気づく事が出来ない。

「やめろおおおおおお！」

友人が自分の為に行動し、そのせいで死んでしまっだなんて許せない。守らなければ、どんな手を使っても。

そう思った時には、鏡矢は力を使っていた。今まで自分が戒め、使うことを禁じていた絶対的な力を。

朱い月

漆黒だった鏡矢の瞳が瞬間的に鮮やかな赤色へと変わる。その瞳の中央には、まるで三日月の様な模様が刻まれていた。

村雨へと襲いかかろうとしていた刃は、鏡矢の瞳が変貌したと同時に動きを停止する。思いもよらぬ出来事に、空剣想像の能力者である遠野は目を見開いた。

「な、なんで俺の刃が動きを止めたんだ！？」

敵の様子がおかしい事に気付き、村雨は一旦動きを止める。

その隙に、神崎は村雨の元へと駆け寄った。これで空剣想像が村雨を捉える事はない。

「……まあいいや。あくまで俺の目的は高天原鏡矢の殺害だからね」

開き直った遠野は、鏡矢の方へと視線を戻す。そして、彼の目が血の様な赤色に染まっている事に気付いた。

（目が赤く変色している？ ここにきてレベルSの力を使う事にしたのか？ だけど、満足に動けない上に大量の剣に囲まれているんだ。今更この状況をひっくり返すなんて不可能だ）

自分の勝利を確信し、遠野は高らかに右手を上げる。

この右手を振り下ろせば、空中に作られた大量の剣が鏡矢を襲うだろう。空気の剣が鏡矢の肌を裂き、抉り、突き刺し、地面を鮮やかな血で埋め尽くすのを想像して、遠野はニヤリと笑みを浮かべた。

「さあ、俺の剣を存分に喰らえ！」

「……残念だが、この刃が俺を捉える事はない」

振り下ろそうとした腕が、鏡矢の言葉によって停止させられる。呆れたといった表情を浮かべて、遠野は鏡矢へと言葉を発した。

「何を馬鹿な事を言ってるんだ？ 命乞いをするにしてももう少しマシなやり方があると思うけど」

「既に勝負は決した。俺の友達に手を出そうと考えた時点だな」

ハツタリを言っているのかと遠野は疑う。が、鏡矢の表情には先程の焦りや怒りといった感情は見受けられない。今はただ、無表情に遠野の事を見つめていた。

自らの中に湧き上がってきたわずかな不安を、遠野は笑いながら否定する。

（ありえない。俺の空剣想像の出現速度と反応速度は共に0、15秒。人間の反応速度の限界値と大差ない。いくらあいつの能力が凄かろうと、俺の能力の方が速い！）

遠野は目を見開き、ただ一言だけ言い放つ。

「死ねえ！」

力強く右腕が振り下ろされた。その動作に連動して、大量形成された半透明の刃が動き出す。

空剣想像の能力者である遠野自身に向かって。

「!？」

驚きを露にした直後、幾つもの刃が遠野の身を裂き、抉り、突き

刺す。

痛みや驚愕による絶叫が中央広場内に木霊する。その場にいた者は、遠野の叫び声に思わず身を震わせた。ただ一人、高天原鏡矢を除いて。

全ての刃が消えた時には、遠野は地面に倒れ伏していた。あまりにも大量な出血で、遠野の周りには赤色の水溜りが出来ている。

「ど、どうなってるんだ？ どうして自滅を？」

村雨は釈然としない様子で呟いた。彼の言葉は今起きた光景を目撃した人間全員の疑問だろう。

その中の一人である青谷は、認識不可を使いながらゆっくりと鏡矢へ近づきながら考える。

（今の状況だけを見れば遠野がただ自滅したようにしか見えないが、攻撃を開始する瞬間まで遠野は高天原へと殺意を向けていた。思えば、奴の動きがおかしくなったのは、高天原の目が赤色へと変わってからだ。……これはあくまで推測でしかないが、高天原の能力は相手の目を見て行動を操る能力なのではないか？）

それなら村雨への攻撃の中断、自滅について説明がつく。そして、能力のタネさえ分かれば、青谷に恐れるものなどありはしない。

（目を合わせる事で発動する能力なら、相手の目を見なければいいや、そもそも高天原には俺の姿が見えていないのだ。任務の遂行に支障はない）

ロープの懐へと手を伸ばし、青谷はナイフを引き出した。それを前に構え、自らに背を向けているターゲットへと刃を突き立てる。

（お前には恨みなどない。だが、これは任務だ）

ゆっくりと移動していた足の速度を徐々に上げ、青谷は後ろから鏡矢へと迫る。ナイフが太陽に照らされ、鈍い光を放った。

しかし、結果としてその刃が鏡矢の肌を突き刺す事はなかった。

身を翻し、鏡矢は突き出された青谷の手首を掴んだ。そして、静かに赤い双眸で襲撃者を睨みつける。

朱い月？

「そ、そんな馬鹿な！？」

認識不可は人に己の存在を認識されなくする能力だ。ただ透明化するのとは違い、相手の脳が青谷の姿を認識する事を拒む。ゆえに、自分の攻撃を受け止められるところか、どの位置にいるかさえ分かる筈がない。

しかし、鏡矢は赤い双眸でしっかりと青谷を捉えていた。

「やはり襲撃者は遠野だけじゃなかったな。事前に予想しておいたおかげで手を打つ事ができた」

「貴様、一体どうやって俺の認識不可を！」

驚愕で目を見開く青谷に、鏡矢は無表情に返答する。

「俺の能力で周囲に潜んでいる人間がいたら姿を現すように操った。結果、お前はこうして俺の目の前へと現れている」

「やはり、相手の行動を操る能力だったか。そして、その力で俺の能力を無効化したというわけだ」

だが、青谷は鏡矢の言葉に納得できなかった。

（俺は高平原と視線を合わせていない。それに、目が合っていないのなら俺の姿は認識されていない筈だ）

視線を合わせる事が条件なのならば、青谷に鏡矢の能力が適応される事はない。そう、条件が仮説通りだったのなら。

実際の所、鏡矢の朱い月は視線を合わせる事で発動する能力など

ではない。鏡矢が相手そのものを見る。もしくは相手が鏡矢の体の一部分でも見た瞬間に発動するというものだった。

つまり、能力が発動した時に鏡矢を見ていた時点で、遠野や青谷は朱い月による洗脳を受けていた事になる。

鏡矢は視線を外さぬまま、青谷を睨みつける。

「お前には俺の質問に答えてもらうぞ。誰に俺を殺すように依頼されたかを」

そんな質問に答える筈がないだろう。そう青谷が返答した瞬間、鏡矢の赤い瞳が強く瞬いた。

その怪しげな朱色の光は、青谷の瞳から脳へと伝達される。脳の思考回路が一瞬で書き換えられた。

朱い月の支配に堕ちた青谷は、自分の知っている依頼者の情報を語りだす。

「……依頼者は眼鏡を掛けた男だった。歳はまだ若い。お前を殺すように依頼されたが、お前という人間に興味を抱いている様子だった。それ以外の情報は俺も分からない」

青谷自身に操られている自覚はない。朱い月がレベルSと断定されているのは敵を操るからという理由だけではない。発動条件の満たしやすさに加え、相手が脳を操作されたという事実に決して気付かない事にある。

いつ朱い月を掛けられたのか、どこで掛けられたのか、本人では決して分からない。そして洗脳を受けた人間は、それをさも自分の意思のように勘違いして行動を起こすのだ。

「一応問うが、本当にそれ以外の情報を知りえないんだな？」

「ああ、俺が知っているのは今の情報だけだ」

「そうか……なら、もうお前に用はない」

掴んでいた相手の手首を離し、鏡矢は傷みを堪えて体を回転させる。左手に力をいれ、体重を乗せた裏拳が青谷のこめかみを捉えた。

「ぐうう！」

あまりの衝撃で横へ数メートル飛ばされて、青谷は背中を引きずりながら地面へと仰向けに倒れた。

姿を現したのが青谷だけという事は、これ以上自分を狙っている敵はいないのだろう。辺りを確かめながら鏡矢はそう結論づけ、インテリジェント・デバイスのセーラに声を掛ける。

「セーラ、SCGの人間に連絡を入れてくれ。あと、ついでに救急車を頼む」

「分かりました」

パートナーへの頼み事を終えると、鏡矢は地面に膝をついた。それと同時に、今まで赤かった鏡矢の瞳が元の漆黑へと戻る。

今までの様子を見守っていた神崎、村雨、瓜生が鏡矢の元へと一斉に駆けてきた。

「鏡矢さん、大丈夫ですか!？」

「おい、しっかりしろ！」

「カガミン、死んじゃ嫌だよ！」

心配そうな表情を浮かべている三人に、鏡矢は少しだけ口元を上げた。

「大丈夫。死ぬほどひどい怪我じゃないから。……けど、少し疲れ

「たから寝るね」

そう告げると、視界がじわじわと黒色に塗りつぶされていく。三人の言葉がはつきりと聞こえなくなってきた。暗闇が、やがて鏡矢の意識を遮断した。

終幕

グリーンパーク爆破事件の真相は事件が起きて五日経過した今も分かっていない。

メディアなどではテロ組織による攻撃という事で一応収まっているが、事件の深部に関わっている鏡矢にはもやもやとした何かが残っていた。

黒幕の存在は分からず、自分は入院。鏡矢を狙ってきた殺し屋達を撃退する事には成功したが、事実としては何の解決にもなっていない。

ベッドから窓の外を覗く。空は、鏡矢の心同様に曇っていた。

「朱い月を使った事を悔いているのですか？」

普段は身につけられているインテリジェント・デバイスのセーラは、現在枕元に置かれていた。画面を点滅させ、浮かない顔をしている主へと話しかける。

「……ああ」

仲間を助ける為とはいえ、自分が戒めていた力を使った事への不快感は拭えない。

毛布をぎゅっと握り、鏡矢は悔しげに下を向いた。

そんな時、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。「失礼します」という聞き覚えのある声と共に、彼女は病室へと足を踏み入れる。

「……久しぶり、神崎さん」

表情を微笑へと変えて、鏡矢は神崎へと視線を向ける。

「一時間早く来ていれば良かったね。村雨や瓜生さんもここに来ていたんだよ」

「え？ そうだったんですか？」

神崎が来る一時間前に、村雨と瓜生は鏡矢のお見舞いにやってきていた。お見舞いにきた割には、持ってきた果物を自分達で食べ始めてしまったり、バシバシ怪我をした場所を叩いたりしていたが、事件以降、村雨達と仲良くなったらしい神崎は、嬉しそうに笑みを浮かべた。

「みんな、鏡矢さんが大好きなんです」

「うーん、どうなんだろうな」

そうだね、とは自分では言い難いので、鏡矢は曖昧に神崎へと返答した。

ベッドの傍にある椅子に腰掛け、神崎は鏡矢に体を向ける。

「体調はどうですか？」

「うん、傷の治りは順調だよ。もう少ししたら退院できる」

「そうですか。鏡矢さんが退院したら、今度は瓜生さんや村雨さんとも一緒にどこかへ出かけたいですね」

「そうだね。その時はみんなで相談して決めようか」

退院後の話をしてから、二人の間に会話は無くなった。しかし、それは決して気まずい沈黙などではなく、心地の良い静寂だった。そんな静寂の中、神崎はグリーンパークで思った事を口にする。

「……鏡矢さんは、どうして追い詰められてからあの赤い目を使っ

たんですか？ 最初から使っていれば、怪我を負ったりは……」

彼女の表情が、どこか申し分けなさそうなものになった。言った後に、言うべきではなかったと後悔しているのだろう。

鏡矢はそんな彼女に優しく笑みを浮かべ、自分の手元へと視線を落とした。

「……前の君と同じだよ。俺は、自分の能力が恐ろしいんだ」

布団をぎゅっと握りながら、鏡矢は無表情に言葉を紡ぐ。

「俺はあの時、仲間を守るために『朱い月』を使った。けど、村雨や瓜生さんは、俺の事を恐ろしいと思ったかもしれない。……俺はもう嫌なんだ。この力のせいで、誰かに恐れられることが。そして、誰かを傷つけてしまうことが」

少し前に、鏡矢は神崎に言った。自分の能力と向き合わなくてはならないと。

（能力と向き合っていないのは、俺も同じだったという事か）

能力を使わないために体を鍛え続けた。幼少からの長きに亘る鍛錬のおかげで、鏡矢は『朱い月』を使わずとも能力者と渡り合えるようになった。しかし、それはただ、自分が能力を使わないで済む方法を見出しただけで、根本的な解決には何一つなっていなかった。それを知って、鏡矢は顔を俯かせた。

（神崎さんは、俺をどう思っているんだろうか？）

彼女も、心の中では恐れているのかもしれない。そう思うと、彼

女の顔を見るのが途端に怖くなった。

わずかな静寂の後、鏡矢は自分の手を包み込む温かな感触に顔を上げる。

神崎が、鏡矢の手を優しく握っていた。

「私には、鏡矢さんの能力をどうする事も出来ません。……だけど、傍にいた事なら出来ます。私だけじゃないですよ。村雨さんも瓜生さんもです。鏡矢さんが能力を使いたくないのなら、私達が力になりますから」

「……神崎さん」

こみ上げてきていた不安が徐々に消えていく。鏡矢の胸に、ジントくるような温かさが広がった。

（いつまでもこのままではいけない。向き合わなくては、自分の能力と）

そう心に決めた時、曇り空の間から日が差し込んだ。病室へと差し込んだ太陽の光が、鏡矢と神崎の二人を包み込みこんだ。

ガラス張りの窓の外を準指令、来栖修二郎は眺めていた。

暗くなった街を、建物や車のライトが照らしている。それはとても幻想的で、美しい景色だった。

「来栖様。どうしてあのような無法者達に、高天原鏡矢を殺すよう指示なされたのですか？」

窓の外を眺めている彼の後ろに立っているのは、女性用のスーツに身を包んだ女性、天音凍花である。

天音は、自分の仕えている人物の行動の意味を問うた。

「殺すように指示はしましたが、その実、私は彼らが高天原鏡矢を殺せるとは全く思っていないませんでした」

「では、どうしてそのような指示を？」

夜景から視線を外し、来栖は微笑を浮かべながら振り向く。

「彼の能力が知りたかったのですよ。レベルSの能力は、発現されたケースが指の数よりも少ない。高天原鏡矢の能力の全貌が明らかになれば、能力研究開発を更に発展させる事が出来るかもしれませんからね。おかげで、彼の能力がどのようなものか分かりました。まさか、彼の宿す能力が魔眼だったとは。ふふっ、やはり君は面白い。高天原鏡矢」

微笑を浮かべて語る彼の表情は、一見すればいつも通りに見える。しかし、天音は彼の目に宿る光が怪しく輝いているのを見逃さなかった。

彼の行動は、国を守る者に相応しくないものに違いない。SCGの総司令が聞けば、即刻来栖を処分するだろう。

だが、天音は来栖の返答を聞いて、ただ頷いただけだった。

天音にとっては、主の言葉こそが全てだ。それが例え許されざる事なのだとしても、天音の忠誠心が揺らぐ事はない。

窓ガラスに水滴が跳ねる。徐々に振り出した雨は、やがて窓ガラスに映る二人の姿を滲ませた。

転校生

イングランド北西部にある中心都市、リヴァプール。

街の一部が海商都市、リヴァプールとして世界遺産にも登録されているこの街で、男はひたすら逃げ回っていた。

（くそ、くそっ！ 途中まで、計画は順調に進んでいたのに！）

男は、レベルAの能力者だった。世界中で名の知れている能力者犯罪組織、クリエイトに属する人間だ。

今日、本来ならこの時間にクリエイトのメンバーの幾人かが世界遺産アルバード・ドッグを襲撃する予定になっていた。倉庫の中にあると言われている、大量の火薬を盗み出すために。

しかし、その作戦が決行される事はなかった。集合場所となっていた所へ向かった時、クリエイトのメンバーは一人残らず殺されていたのだ。血溜まりの中に立つ、一人の人物の手によって。

美術館や博物館の多いこの街の中を、男はただがむしゃらに走り続ける。日が沈み、美しくライトアップされた街並みに目もくれずに、ただただ、足を動かした。

「そろそろ鬼ごっこには飽きたな。私相手に逃げようというのが、そもそも間違っている」

男の目の前に突如人影が現れる。ひいっと悲鳴を上げて、男は後ろに後ずさった。

その人物は、ローブで体をすっぽりと包み込んでいた。顔は、こちらからでは見えない。

（い、一体どうやって現れた！？ 先回りされたのか？ 無理だ！

デタラメに走っていたんだから、見つかる筈がない！)

困惑する男に、突如現れた人物は話しかける。

「お前も能力者なのだろう？ それなら、逃げていないで私を殺しに來い。お前以外の人物は、全員で私に挑んできたぞ？」

クリエイトでアルバード・ドッグ襲撃に参加する予定だった能力者の数は十二人。つまり、目の前の人物は男を除いた十一人を同時に相手取り、一人生き残ったという事になる。

「……この、化物がああああああ！」

体の震えを押さえ、男は獣の様な叫び声を上げてローブの人物に飛び掛る。

男が腕を突き出すと、周りの風が腕の前へと集められる。一点に集中されたエネルギーを放出すると、そこに爆発的な突風が生まれた。

自分の攻撃に手ごたえを覚え、男はにやりと笑みを浮かべた。

「く、くくく、はあっはははは！ どうだ、俺は、他の奴らとは違うんだよ！」

「ふむ、風を操る能力者か。確かに強力な能力だな」

「!？」

声は後ろから聞こえてきた。振り向くと、そこには先程からいたかのようにローブの人物は立っていた。

「だが残念だな。私の前では、どのような能力も意味など成さない。魔眼『氷の花』の前ではな」

「く、くそがあああああああ！」

再び男が手を突き出そうとした時、目の前には誰もいなかった。そして、不意に首元に冷たい感触を覚える。

「私が相手だったのを後悔しろ」

次の瞬間、刃物で男の首が切り裂かれる。動脈から噴水の様に血が溢れ出し、辺りを鉄の匂いが満ちた。

ドシャと音を立てて倒れた男を見下ろしながら、ロープの人物は身を翻す。

返り血を浴びたロープを脱ぎ、ロープの人物の姿が外界に晒された。

一本一本が美しい、長く伸ばされた金色の髪。陶器の様に白い肌は、まるで雪のようだった。

そして、十人が十人、間違いなく見蕩れるであろう容姿。

そんな彼女は金色の髪を払って歩き始める。

彼女の瞳は、凍てつく様な水色の光を放っていた。

グリーンパーク爆破事件から、早くも二週間が経過した。

無事に退院した鏡矢は、既に彩花学園学生寮に戻っている。登校準備を終えて、鏡矢は学生寮を後にした。

三日前から授業には復帰しているが、何だか彩花学園がとても久しぶりに感じられる。見慣れている筈の景色をゆっくり歩きながら見ていると、後ろから声を掛けられた。

「やつほーカガミン！ 久しぶりだねえ！ 十年ぶりくらいかな？」
「昨日も一昨日も会っているよね。瓜生さん」

微笑を浮かべて返答し、鏡矢は瓜生が隣まで来るのを待った。

「いや、カガミンがいない時期があまりにも長くて。奏ちゃん、すごい寂しかったよー！」

「長いと言っても、一週間とちょっとぐらいだけだね」

一緒に並んで歩き始めると、何人かの生徒がこちらに視線を向けていた。彩花学園内に存在すると言われている、瓜生奏ファンクラブの人間かもしれない。

（ファンクラブの人間からすれば、隣を歩いている俺はきっと邪魔なんだろうな）

そんな視線に全く気付かずに、瓜生は鏡矢に話しかける。それに、鏡矢は思わず苦笑を浮かべた。

「そっいえばカガミン知ってる？ 今日、内のクラスに転校生が来るんだよ」

「……転校生？ こんな時期に？」

今は六月末。あと一週間もすれば七月だ。転校してきて一ヶ月で夏休みというこの時期に転校生とは珍しい。

「うん。話によると、どうも外国から来た人みたいだよ。確か、女の子だったかな」

「よくそんな情報を知ってるね。どこから聞いてきたんだ？」

「職員室！」

胸を張って答える瓜生。転校生の情報を直接職員室に聞きに行くアクティブさが彼女らしい。

「あ、だからといって転校生に恋愛フラグを立てたりしたら駄目だよ！ カガミン、ほっとくとバンバン女の子にフラグ立てるからね」「フラグ……？ 分かった、気をつけるよ」

どういう意味がよく分からなかったが、あまり転校生と関わるなという感じだろうと解釈し、とりあえず鏡矢は頷いた。

「それなら良し！ さ、そろそろチャイムが鳴る頃だから急がなきゃ。カガミン、教室まで競争ね！」

言って、瓜生は承諾を得ずに走り出す。

「……元気だなあ。瓜生さんは」

笑顔で振り向き、こちらに手を振っている瓜生の元へ鏡矢は駆け出した。

フィリス・リンステッド

瓜生と競争して教室に辿りついて、鏡矢は座席に着いた。HRまであと五分といったところだ。

教室内は、もうすぐ来る転校生の話で持ちきりだ。耳を澄ませば、次々と『転校生』『美人』といった単語が聞こえてくる。

しばらく適当に仮想画面で教科書のデータを眺めていると、教室の扉が開かれる音が聞こえた。担任が隣に女の子を連れて教室に入ってきたのである。

「お、おい、想像してたより、全然可愛いじゃねえか」
「まるで人形みたいだ」

誰かが、そんな言葉を口にした。
教壇に担任と共に並んで立っているその少女は、とても美しかった。

長く伸びた金色の髪に、雪を思わせる白い肌。そして、守ってあげたくなるような華奢な体つき。

「はい。皆さんも聞いていると思いますが、彼女が今日からこの学校で勉強をする事になる転校生です。自己紹介を」

担任が促すと、少女は頷いて一歩前に出る。

「フィリス・リンステッドだ。出身地はイギリス。こちらには、S C G イギリス支部から派遣されてやってきた。こちらの環境にはなれていないから、皆に迷惑を掛けるかもしれないが、よろしく」

転校生、フィリスの言葉に、教室内は更に騒がしくなった。

金髪碧眼の美少女が転校してきた。これだけでも騒ぐには十分だろうが、彼女の言葉の中に含まれていた、とある単語が生徒達をざわめかせている。

SCG。能力者統括組織。能力者なら誰でも知っている、能力者の暴走を止めたり、時には保護する団体。

彼女は、そのイギリス支部からやってきたと言ったのだ。

担任がざわめく生徒達を鎮めるのに二分かけ、フィリスに座る席を指示する。

「窓際が一番後ろが空いているから、そこに座って。教科書などのデータは、座席に用意されているから」

「分かりました」

凜とした立ち振る舞いで、フィリスは座席の間を進む。自分へ視線が注がれているのを気にした様子はない。

（休み時間になったら、彼女への質問ラッシュが始まるだろうな）

そんなフィリスを遠目に眺めながら、鏡矢はぼんやりそう思った。

しかし、鏡矢の予想は思いもしない形で外れた。

休み時間、フィリスの元へクラスメイト達が近づいていくというのは合っていた。が、彼女は「すまない。少し用がある」と言ってクラスメイト達を置いて歩き出す。

任務でも入っているのだろうか？ 同じSCGのメンバーである鏡矢は、そう考えてフィリスへ視線を向ける。

フィリスとの距離がどんどん近づいてくる。鏡矢は真ん中の一番

後ろに席を取っているため、フィリスは自分の後ろを通って教室に入り口へ向かうつもりなのだろう。

じろじろ見ていると失礼だと思い、鏡矢は視線を外して開いていた仮想画面をクリックして消した。

「お前が高天原鏡矢か？」

澄んだ声が、鏡矢の鼓膜を震わせる。

数秒間の硬直の後、自分が呼ばれているのだと気付いて鏡矢は振り返った。

「……そうだけど、俺に何か用かな？ フィリスさん」

「ああ、少しお前と話がしたい。……ここでは人が多いな。場所を変えてもいいか？」

「構わないよ」

椅子を引いて立ち上がると、フィリスが先に歩き出す。続いて後ろに歩き出す時、クラスの男子生徒達の射る様な視線が鏡矢へと向けられた。

教室の外に出ても、視線が集まるのは変わらない。噂の転校生を見ようと集まっていた生徒や、廊下で立ち話をしていた生徒達の視線が、廊下を歩く二人へと注がれる。

居心地の悪さを覚えながら、前に行くフィリスに鏡矢は話しかける。

「人のあまりいない場所と言っていたが、どこに行こうとしているんだ？」

「屋上だ。彩華学園の屋上は庭園になっていると聞く。主に昼の間帯に人が集まるが、時間の少ない休み時間には利用する人間も殆どいない」

「……よくそんな事を知っているな。転校してきたばかりなのに」
「こちらに来る前に、学園内の構造や周辺の地形は把握済みだ」

階段を登って最上階に向かうと、廊下の先に光が見えた。

廊下を抜けるとそこが庭園だ。床全体には芝生が埋められており、中央には噴水が設置されている。

噴水の前までやってくると、フィリスは歩みを止めた。

「それで、俺に一体何の用だ？ 休み時間は長くないから、出来れば手短に頼む」

「分かっている。お前を呼び出したのは、単に軽く挨拶をするためだ。SCGの任務で、お前とはペアになる事もあるだろうからな」

任務の難易度が高い場合、チームを組んで任務に望む。今までは単独で任務をこなしていたが、これからは更に難易度の高い任務を任されるかもしれない。そう考えると、確かにフィリスとはチームを組む可能性は大いにある。

「なるほど。じゃあ一応自己紹介しておくよ。高天原鏡矢。能力は動力操作。まあ、身体能力を向上させる能力だよ。じゃあ、これで用は済んだという事でいいのかな？」

「いや、挨拶ついでに、お前に一つ聞きたい事がある。……聞いたと言っても、もう知っている事なのだがな」

「？ 言っている意味が分からないんだが」

今まで噴水を見ていたフィリスは鏡矢へ振り返った。不意に吹いた風が、彼女の髪をなびかせる。

フィリスは腕をゆっくりと上げて、首を傾げる鏡矢に指を指した。

「お前、魔眼使いなのだろう？」

魔眼使い

風が、不意に強く吹きぬけた。

フィリスから投げかけられた質問を理解するのに数秒の時間を掛けて、鏡矢は口を開く。

「……何を言ってるんだフィリスさん？ 俺の能力はさっきも言った通り動力操作だよ。魔眼だなんて能力は知らないな」

感情が表情に出ないよう気をつけながら鏡矢は考える。

（なぜ俺が魔眼使いだと分かるんだ？ 俺の能力を知っているのは身内と村雨、神崎さん、瓜生さんだけのはずだ。誰かがバラすにしても、フィリスさんと接触するような時間はなかった。……それに、神崎さん達が俺の能力をバラすというのも考えづらい）

会ってあまり時間が経っていないが、神崎達は信用できる人物達だ。そんな彼女達を一瞬でも疑った事に罪悪感を覚えながら、鏡矢はフィリスの言葉を待った。

フィリスは微笑を浮かべ、鏡矢へと一歩接近する。

「ごまかそうとする辺り、お前は魔眼使いである事を隠して生活しているようだな。身体能力が常人よりも高いから、それを人に能力だと思わせている。推測するに、お前は魔眼の力を恐れているわけだ」

「……！」

流石の鏡矢も、これには感情を隠せない。

魔眼使いだと確信した上で、フィリスは鏡矢への魔眼の思いを看

破した。

鏡矢は表情を引き締め、フィリスに対して臨戦態勢を取る。

「フィリスさん、君は一体何者なんだ？」

警戒心を露にしている鏡矢に、フィリスは小さく溜息をついた。

「お前と同じ魔眼使いだ。魔眼同士の共鳴があった段階でそれは分かりきっているだろう？」

「魔眼同士の共鳴？」

初めて聞く言葉に、鏡矢は眉をひそめる。

「魔眼使いが近くにいると、魔眼がその存在を所有者に知らせるだろうが。……もしかしてお前、私が魔眼使いだと分からなかったのか？」

「君がレベルSの能力者という事ぐらいしか分からなかった」

それも含めて、フィリスが高校一年生にしてSCGに所属している事から推測したに過ぎないのだが。

「……なるほど。魔眼使いであると隠しているお前は、普段全くと言っていい程魔眼を使用していないわけか。ゆえに魔眼が私を魔眼使いであると把握出来なかった」

鏡矢の前で歩みを止めたフィリスは、その美しい碧眼で鏡矢を見つめながら言葉を紡ぐ。

「どうしてお前は魔眼を使う事を恐れる？」

「ど、どうしてって……」

強大すぎる力の行使は、必ず誰かを傷つける。特に、人の行動を操れてしまう鏡矢の魔眼『朱い月』は、人に望んでいない行動をさせる恐ろしい力だ。そんなものを無闇に使えるわけがない。

黙りこんだ鏡矢をしばらく見つめていたフィリスは、やがてその視線を外して鏡矢の横を通り過ぎる。

「なぜ魔眼を使う事をためらうのか、私には理解できないな。与えられた力を使うのは当然の事だ。お前が戦ってきた相手は魔眼を使わずとも倒せる相手だったのかもしれないが、これから先、魔眼を使わなければならない局面に立たされたのなら、今のお前では死ぬ事になるぞ」

「……俺は、その魔眼を使わないために鍛え続けてきたんだ。魔眼を使わずとも、任務を成し遂げて見せる」

鏡矢の言葉を聞いて、フィリスはゆっくりと振り返る。

その直後、ある程度距離の開いた場所に立っていたフィリスが、鏡矢の目の前にいた。

「早速一度死ぬ事になっていたぞ、お前」

鏡矢の胸の前にダガーナイフを突きつけながら、フィリスは冷たい眼光を鏡矢に向ける。

蒼色の輝き。彼女の瞳から輝くそれは、今までに見た事の無いような、美しい光だった。

何が起きたのか分からない鏡矢からナイフを引いて、フィリスは身を翻す。

「私は魔眼を使うのを躊躇ったりはしない。お前とは違ってな。話の続きは後にしよう。そろそろ休み時間が終わる」

何事もなかったかのように歩みを進めて、フィリスは屋上の出入り口へと向かう。

彼女の姿が消えるまで、鏡矢はただフィリスの背中を呆然と眺めている事しか出来なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2824v/>

SCGの魔眼使い

2011年10月18日21時57分発行